

志紀遺跡（その4）

大阪府営志紀住宅建替え事業に伴う発掘調査報告書

1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

志紀遺跡（その4）

大阪府営志紀住宅建替え事業に伴う発掘調査報告書

1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

河内平野の東南部、大阪府八尾市周辺には弥生時代前期に水稻農耕が始まって以来、大和川の氾濫と戦いながら人々が残した生活の跡が数多く残されています。

その一角に所在する志紀遺跡は、府営住宅建替え事業等に伴い1982年以来10数次の調査が行われ、弥生時代から鎌倉時代の水田跡が残っていることが知られています。今回報告する調査区は志紀遺跡の西南部にあたりますが、従来の調査と同様、9世紀から13世紀の条里型水田、弥生時代から古墳時代の小区画水田を検出しました。各時代の水田層の間には洪水でもたらされた砂層がはさまり、たび重なる氾濫にもめげず嘗々と耕作が続けられたことが窺えます。

また、畿内第Ⅰ様式弥生土器と突蒂文土器が3層にわたって共存していることが確認され、志紀遺跡の出現の事情を解明する上で重要な資料を得ることができました。近年調査が進んだ隣接する田井中遺跡の調査結果と合わせ、河内平野の開発の歴史にアプローチする上で大きな成果ということができます。この成果が各方面で利用され地域の歴史の研究に寄与することを希望します。

最後に、発掘調査および遺物整理事業の実施にあたり多大の御協力をいただきました関係各位に深く感謝するとともに、今後も文化財保護行政に御協力いただきますようよろしくお願ひ申し上げます。

平成10年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例　　言

- 1 本書は大阪府八尾市志紀町西1～4丁目に所在する志紀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は府営八尾志紀住宅建替えに伴うもので、大阪府建築部住宅建設課の委託を受け1995, 6年度に発掘調査を、1997年度に遺物整理事業を実施した。
- 3 発掘調査事業は当センター中部調査事務所調査第1係係長岩崎二郎、技師市村慎太郎が担当し、遺物整理事業は岩崎二郎が担当した。
- 4 本調査に当たっては国土座標第VI系に基づく3級・4級基準点を設置し、それに基づいて区割り・実測を行った。本書に掲載した遺構実測図には基準となる座標値を表示した。遺構図は原則として上が北になるように掲載した。やむをえずその原則に従えない場合は方位を明示した。標高は東京湾標準潮位を基準とする。
- 5 本報告書に掲載した遺構写真は現場担当者が、遺物写真は中部調査事務所調査第1係主査片山彰一が撮影した。
- 6 本調査に伴い土壌分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し実施した。また、出土植物遺体の同定は中部調査事務所調査第3係主査山口誠治、動物遺体の同定は大阪市立大学医学部第二解剖学教室安倍みき子先生による。分析結果は本書第4章に掲載した。
- 7 本書の作成に当たっては、市村の援助のもとに岩崎が編集を担当した。原稿執筆分担は下記の通りである。

第1～2章	岩崎二郎
第3章	市村慎太郎・岩崎二郎
第4章第1節	パリノ・サーヴェイ株式会社
第2節	山口誠治
第3節	阿部みき子
第5章第1節	市村慎太郎
第2節	岩崎二郎
- 8 出土遺物・写真・図面などは当センターが保管している。
- 9 発掘調査および遺物整理事業において下記の方々のご指導ご協力を賜った。記して感謝する。

大阪府教育委員会文化財保護課 岩瀬 透、大野 薫、亀島重則、阪田育功、藤沢真依
八尾市文化財研究調査会 西村公助、古川晴久
大阪市文化財協会 田中清美、松尾信裕

目 次

第1章 調査にいたる経過	7
第2章 立地と環境	8
第3章 調査の成果	10
第1節 層位と遺構面	10
第2節 96-1区	14
1. 第1遺構面	14
2. 第2遺構面	16
3. 第3遺構面	18
4. 第4遺構面	18
5. 第5遺構面	22
6. 第6遺構面	27
7. 第7遺構面	30
8. 第8遺構面	31
9. 第9遺構面	32
10. 第10遺構面	32
11. 第11遺構面	34
12. 第12遺構面	36
13. 第13遺構面	38
14. 第14遺構面	40
15. 第15遺構面	40
第3節 96-2区	41
第4節 96-3区	45
第4章 自然科学的調査	50
第1節 志紀遺跡（その4）における土地利用状況に関する検討	50
第2節 志紀遺跡出土植物遺体について	67
第3節 志紀遺跡出土動物遺体について	70
第5章 まとめ	71
第1節 志紀遺跡の変遷	71
第2節 突帯文土器とI様式土器の共伴	79

挿 図 目 次

図1 調査位置	7
図2 周辺遺跡分布	9
図3 96-1区南壁断面	12・13
図4 第1遺構面	14
図5 耕作痕	14
図6 SE101	15
図7 第1層・SE101出土遺物	15
図8 第2遺構面	16
図9 第2層・第3層出土遺物	17
図10 第3遺構面	18
図11 第4遺構面	18
図12 第4層出土遺物	19
図13 東端部畦畔と足跡	20
図14 SK401	20
図15 第5層・第6層出土遺物	21
図16 第5遺構面	22
図17 東端部畦畔と足跡	22
図18 大畦畔と杭群	23
図19 大畦畔・SD510断面	23
図20 第7層・第8層出土遺物	24
図21 第5面出土杭	25
図22 第5面出土杭・木製品	26
図23 第6遺構面	27
図24 大畦畔と杭群	27
図25 各遺構断面	27
図26 第9層出土木製品	28
図27 第9層出土土器	28
図28 第6面出土杭・木製品	29
図29 第7遺構面	30
図30 各遺構断面	30
図31 第10層出土遺物	31
図32 第8遺構面	31
図33 第9遺構面	32
図34 第12層出土土器	32
図35 第10遺構面	32

図36 西端部畦畔・水路・足跡	33
図37 大畦畔断面	33
図38 第13層出土遺物	33
図39 第11遺構面	34
図40 落込み内断面	34
図41 第14層出土遺物	35
図42 第12遺構面	36
図43 各遺構断面	36
図44 第15層出土遺物	37
図45 第13遺構面	38
図46 各遺構断面	38
図47 第13面・第16層出土遺物	39
図48 第14遺構面	40
図49 NR1401断面	40
図50 第17層出土土器	40
図51 96-2区断面・第1~3遺構面	42
図52 96-2区第4~7遺構面	43
図53 96-2区第8~11遺構面	44
図54 96-3区断面・第1・2遺構面	46
図55 96-3区第3~7遺構面	47
図56 96-3区第8~12遺構面	48
図57 96-3区第13~17遺構面	49
図58 第1地点堆積物の岩質および試料採取層準	51
図59 軟X線写真・土壤薄片観察による堆積相	55
図60 土壤理化学性の層位の変化	57
図61 出土モモ核の体積変動ヒストグラム	69
図62 志紀遺跡周辺調査位置	72
図63 第14~16層グリッド別土器片数	79

表 目 次

表1 第5遺構面出土枕集計表	26
表2 第6遺構面出土枕集計表	29
表3 出土植物遺体同定表	67
表4 出土モモ核計測表	68
表5 出土動物遺体同定表	70
表6 志紀遺跡周辺調査一覧表	73

図版目次

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 図版 1 堆積物の軟X線写真（1） | 図版36 第7・8層出土遺物 |
| 図版 2 堆積物の軟X線写真（2） | 図版37 第5面枕・木製品 |
| 図版 3 堆積物の軟X線写真（3） | 図版38 第9層・第6面出土遺物 |
| 図版 4 堆積物の軟X線写真（4） | 図版39 第10・13層出土遺物 |
| 図版 5 堆積物の軟X線写真（5）・土壤薄片写真 | 図版40 第14層出土遺物 |
| 図版 6 第1遺構面（全景・耕作痕） | 図版41 第15層出土遺物 |
| 図版 7 第1遺構面（全景・畦畔） | 図版42 第14面・第16・17層出土遺物 |
| 図版 8 第1遺構面（SE101） | |
| 図版 9 第2遺構面（全景） | |
| 図版10 第3遺構面（全景） | |
| 図版11 第4遺構面（全景） | |
| 図版12 第5遺構面（全景・畦畔） | |
| 図版13 第5遺構面（全景・大畦畔） | |
| 図版14 第6遺構面（全景・SD601） | |
| 図版15 第6遺構面（全景・大畦畔） | |
| 図版16 第7遺構面（全景・溝群） | |
| 図版17 第7遺構面（溝・土坑） | |
| 図版18 第8・9遺構面（全景） | |
| 図版19 第9遺構面（全景・SD901） | |
| 図版20 第10遺構面（全景・畦畔） | |
| 図版21 第10遺構面（全景・畦畔） | |
| 図版22 第10遺構面（畦畔・水路） | |
| 図版23 第11遺構面（全景・落込み） | |
| 図版24 第12遺構面（全景・ピット群） | |
| 図版25 第12遺構面（溝群） | |
| 図版26 第13遺構面（全景・溝群） | |
| 図版27 第13遺構面（全景・落込み） | |
| 図版28 第14遺構面（全景・NR1401） | |
| 図版29 第14遺構面（全景・NR1402～1406） | |
| 図版30 96-2区（第10・11遺構面） | |
| 図版31 96-3区（第11・13遺構面） | |
| 図版32 96-3区（第15・17遺構面） | |
| 図版33 第1～3層出土遺物 | |
| 図版34 第4層出土遺物 | |
| 図版35 第5・6層出土遺物 | |

第1章 調査に至る経過

大阪府建築部住宅建設課は府営志紀住宅の老朽化に伴い、同住宅の建替えを計画した。建替え事業の開始に先立ち大阪府教育委員会文化財保護課は1982年試掘調査を実施した。その結果平安時代の土坑等が検出され、以後府営住宅や公務員宿舎の建替えに伴う10数回の調査が実施され、弥生時代から近世にいたる水田を主とする遺構が存在する志紀遺跡として周知されている。

志紀住宅建替えに伴う発掘調査は平成5年度以降は財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施してきた。平成7年4月1日付けで大阪府埋蔵文化財協会と財団法人大阪文化財センターの両者は統合し、新たに財団法人大阪府文化財調査研究センターが発足した。そのため平成7・8年度にわたって実施する志紀遺跡（その4）の発掘調査は同センターが担当して実施することになり、平成8年2月1日発掘調査に着手し、平成9年3月25日終了した。

今回の調査地点は志紀遺跡の南部に当たり、平成6年度に大阪府埋蔵文化財協会が実施した志紀遺跡（その3）調査のB地区の約40m南の住棟部と防火水槽2ヶ所である。住棟部を96-1区、防火水槽部を96-2区、96-3区とした（図1）。

発掘調査終了後、平成9年度に遺物整理事業を実施し、平成10年3月31日すべての作業を終了した。



図1 調査位置 (1/2,500)

第2章 立地と環境

志紀遺跡は東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵にかこまれ、北は河内潟あるいは河内湖に面する河内低地の南東部に立地する。河内湖は近世まで深野池などに痕跡をとどめていたが、現在湖水はなくなり淀川下流域の低地と一体化している。遺跡は大和川が河内低地に到達した地点から約3.5km西北の、旧大和川の本流である長瀬川と玉串川が分岐する地点の約1km西に位置する。地形分類上は扇状地性低地とされ、発掘調査によっても何層もの洪水層が検出されている。そのため集落はあまり形成されず、弥生時代以来連続として水田として利用されてきたことが確認されている。1960年代頃までは水田がひろがり、条里型地割りをよく残していたが、現在は市街化の進行が著しい。

旧石器時代には遺跡南方の羽曳野丘陵北縁の低位段丘に長原、八尾南、国府等の遺跡が知られている。縄文時代前期も国府遺跡や恩智遺跡など羽曳野丘陵辺や生駒西麓扇状地に遺跡が営まれた。縄文時代後期から晩期前半にかけて遺跡は増加し、生駒西麓から羽曳野丘陵北縁にかけて日下、芝ヶ丘、繩手、馬場川、恩智、船橋、国府、林、土師の里など多くの遺跡が営まる。これに対し低地部には断片的に遺物が出土する事例は知られているが、本格的集落は検出されていない。遺跡が低地に進出するのは晩期終末に位置づけられる長原式の時期になってからである。ただし、これには多くの場合畿内第I様式土器が伴い、低地部への進出は稻作の開始と関連しているのは明らかである。

弥生時代前期には河内潟に面する低地に若江北、山賀、亀井遺跡などが出現する。当遺跡周辺でも西南隅の田井中遺跡で本格的集落が営まれており、八尾南や長原遺跡でも長原式とI様式土器の共伴がみられる。中期には低地部で瓜生堂、巨摩、亀井、加美遺跡等で大集落が営まれ、当遺跡周辺では東郷、老原、弓削、東弓削、成法寺、木の本遺跡等が出現する。中期末から後期初頭にかけて河内低地の北辺は沼沢地が拡大したことが指摘されている。そのため後期の遺跡は小規模化しているようであるが、当遺跡周辺ではさらに跡部、小阪合、中田等の遺跡が加わる。

弥生時代後期終末までに前期以来存続した拠点集落は消滅し、庄内期に新たな集落が出現する。そのなかには長瀬川右岸の東弓削から亘振遺跡に至る幅1km長さ3.5kmの巨大遺跡があり、外来系土器を多量に出土するなど特異な方を示し、弥生時代を脱して新たなる集団関係のもとに集落が成立したことが説かれている。

4世紀末から6世紀にかけて南方の羽曳野丘陵では古市古墳群が、東方の低位段丘には長原古墳群が造営される。その他、低地部にも美園・萱振などの古墳が発見され、河内平野の沖積地にも未知の古墳が存在することが明らかになった。6・7世紀には生駒西麓に平尾山古墳群や高安山古墳群などの大群集墳が営まれる。一方平野部では成法寺、東郷遺跡、小阪合遺跡、八尾南遺跡他多くの集落が検出されている。

奈良時代には当地は志紀郡に属し、国府遺跡付近には河内国府が置かれていた。生駒西麓沿いには平野庵寺や大県庵寺、太平寺庵寺、安堂庵寺など多くの寺院が造営されたことが知られている。当遺跡周辺では条里地割りに沿った水田が開発され、戦後市街化するまで連続と水田耕作が続けられた。志紀遺跡でも、古墳時代までは地形に規制された小区画水田が営まれ、平安時代以降は条里制水田が施行されていることが分かっている。条里型水田の開始時期は現状では9世紀が上限で、どこまで遡るか今後の課題となっている。

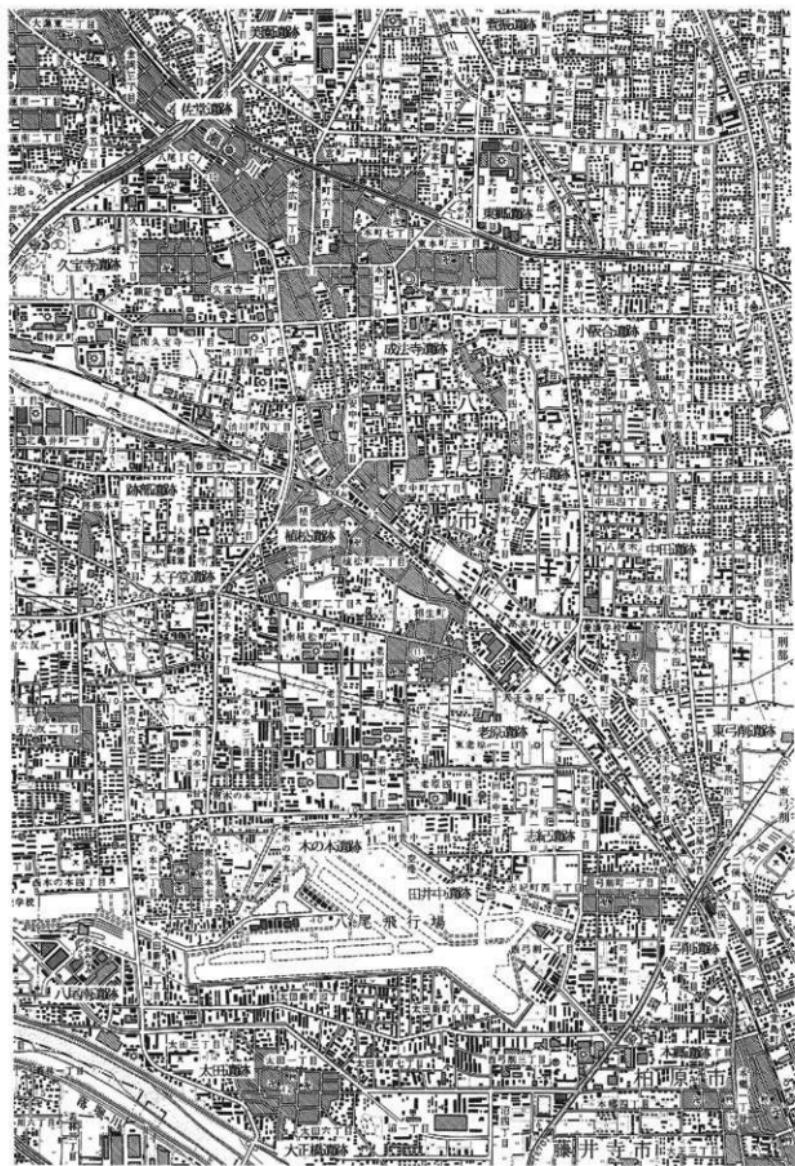


図2 周辺遺跡分布 (1/25,000)

第3章 調査の成果

第1節 層位と遺構面

96-1区南壁の土層断面を東西100mにわたって実測した。そのうち、10mおきに幅1mのみを図3に示す。志紀遺跡では1991年以来上部は45°勾配で掘削されており、今回も踏襲された。今回の調査区は地盤が軟弱で鋼矢板を打設するために地盤改良を必要とした。そのため上部は搅乱され、勾配部分の土層観察は不可能となり、上層断面は人力掘削対象部分しか実測していない。実際の掘削作業ではこれほど細かく分層発掘することは不可能で、掘削単位ごとに第1層、第2層…と名付け第20層まで掘削した。各層で遺構検出を試みた結果14面の遺構面を検出した。

志紀遺跡一帯には中世洪水層と呼ばれる砂礫層があり、この層まで機械掘削されるのが通例である。洪水層の下部約10cmは人力掘削し、瓦器、土師器、須恵器、弥生式土器などが出土した。これを第1層としたが、断面図には図示していない。この層を除去して検出されたのが第1遺構面である。鎌倉時代前期、13世紀代の水田である。

第2層（1・2）は暗オリーブ色粘質シルト、上部は第1層と混じった砂質の強い部分もある。厚さ20~30cmである。平安末から鎌倉初の耕作土で、この層の上面が第1遺構面である。第3層（3）は粘質シルトの非土壤化層で、厚さ約10cmである。この層を除去すると第2遺構面が検出される。平安時代（11~12世紀）の水田である。

第4層（4~7）は灰色粘土で厚さ10~20cmである。部分的に4-1層と4-2層に分層される。東壁では第3層との間にラミナがあるシルト層が介在している。この層を除去したところが第3遺構面で、9世紀前後の水田畦畔が検出された。

第5層（8・9）はオリーブ灰色粘質シルトないしシルト質粘土である。層厚は10~30cmである。第6層（10）は青灰色砂礫で厚さ約10cmであり、志紀遺跡全体に存在し奈良期洪水層と呼ばれている。この層の下では条里型水田は検出されない。今回は96-1区東部にのみ存在し、その範囲内で畦畔が検出された。第5・6層の下が第4遺構面（6世紀後半~7世紀）である。

第7層（11）は暗オリーブ灰色粘土ないしシルト質粘土で、厚さ10~20cmである。第8層（12・13）は青灰色砂礫で、厚さ約10cmである。第6層と同じく96-1区東端のみに存在する。第7・8層を除去すると第5遺構面（6世紀）が検出される。第4面と同様畦畔は第8層の砂礫層が存在する部分のみで検出された。

第9層（14~16）は暗オリーブ灰色粘質シルト~シルト質粘土で、東へ行くほどシルト質を増す。層厚は10~30cmである。この層を除去すると第6遺構面（5世紀）になる。

第10層（17）はオリーブ黒色粘質シルトで、層厚は10~20cmである。96-1区東側の約4分の3に存在する。したがって、この層の下面で検出される第7遺構面（布留式期）は西側4分の1では第6遺構面と面を共有する。

第11層（18）はオリーブ黒色粘質シルトで、層厚は10~30cmである。96-1区のほぼ東半に存在する。よってこの層を除去したところで検出される第8遺構面（弥生時代後期）は96-1区の東半のみで検出された。

第12層（19～26）は暗オリーブ灰色～オリーブ黒色粘質シルトないしシルト質粘土で、層厚は6～20cmである。この層を除去すると第9遺構面（弥生時代中期末）が検出される。

第13層（27～42）の上部は暗オリーブ灰色粘質シルト、下部東側は灰オリーブ色粗砂、下部西側は灰オリーブ色・緑灰色シルトである。層厚は10～20cmである。何回かの西方からの洪水により形成されたと考えられる。この層の下面で第10遺構面（弥生時代中期初頭）を検出した。畦畔、水路などがあり足跡も多数検出された。

第14層（43・44）は黒色シルト質粘土で、層厚は10cmから35cmに達する比較的安定した層で、志紀遺跡の各所で確認されている。上面が第10遺構面であるが、植物遺体が特に西半で多く遺存していた。この層を除去すると第11遺構面（弥生時代前期中段階）が検出される。

第15層（45～53）は炭酸鉄を多く含む黒色シルト質粘土を中心とする。層厚は15cm程。この層の下で検出されるのが第12遺構面（弥生時代前期中段階）である。

第16層（54～59）はオリーブ黒色・灰色粘質シルト・砂で、層厚は約10cmである。この層を除去すると第13遺構面（弥生時代前期中段階）である。

第17層（60～65）は緑灰色粘土で厚さ約10cm、96-1区西部のみの存在する。第18層（66～101）は緑灰色砂礫で、厚さは最大1mに達する。この砂礫層を除去すると第14遺構面である。多数の自然流路があった。砂礫層から遺物は全く出土しなかったのでその時期はわからない。層位的には縄文時代晚期ごろのものと考えられる。

第19層（102～117）の上層は暗オリーブ灰色粘土～粘質シルトで厚さ40～50cm、中層は緑灰色シルトで厚さ10cm以下、下層は暗オリーブ灰色・黒色粘土で層厚は40～50cmである。第14遺構面の約1m下に縄文時代後期の面があることが前回の調査で確認されており、今回もそれに相当する面を検出すべく掘削したが、湧水が激しく遺構検出は不可能であった。遺物は全く出土していない。

第20層（118）は緑灰色粘質シルトで、19層の下で部分的に検出された。96-1区西北端で側溝断面にピット状落ち込みが検出されたので上面は遺構面になる可能性もあるが、掘削限界に達し湧水が激しく面的に検出することはできなかった。本調査区の約40m北の志紀遺跡（その3）調査のB地区の縄文時代後期の遺構面に対応する可能性がある。

各層の堆積時の環境や堆積過程を推定するため土壤分析を実施した。それによると、第1層から第4層は湿地、第5層は乾燥した土地、第6層から第12層上部は湿地、第12層中部は乾燥した土地、第12層下部から第13層は湿地、第14層は乾燥することのある湿地、第15層以下は湿地であったことが推定された。基本的に氾濫原における後背湿地のような場所であったが、洪水等により粗粒な堆積物が堆積した際は湿地は干上がり一時的に高燥な場所になることもあった。明確な耕作土が検出されたのは第3面と第10面である。

また、第9、10、13、14、16層で地震による堆積物の変形ゾーンが確認された。志紀遺跡92-A区や田井中遺跡95-2区でも地震痕跡が検出されており、これらと対比される可能性がある。詳しくは分析報告を第4章に掲載したので参照されたい。

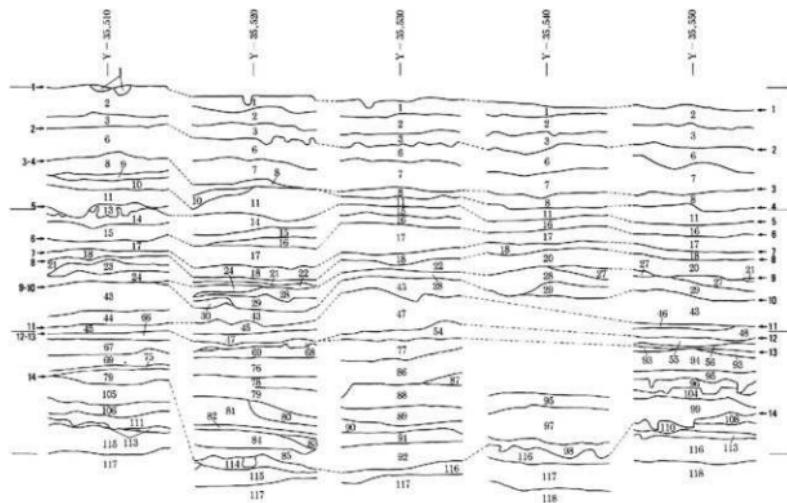
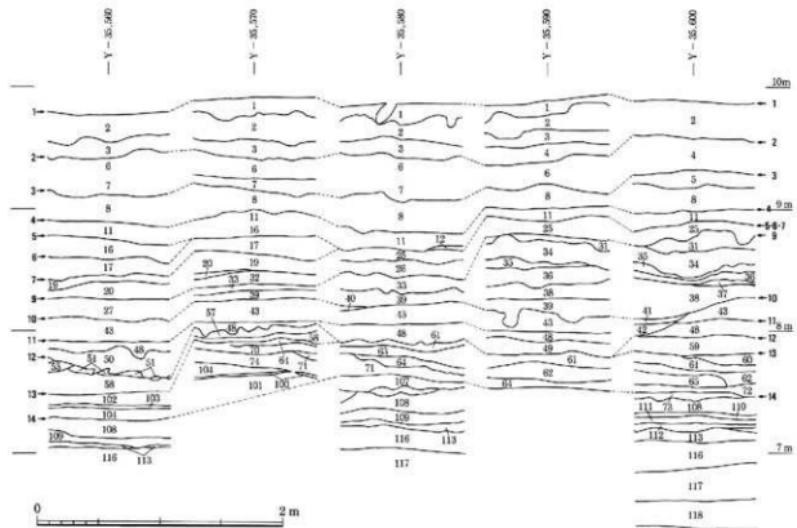


図3

- | | | |
|-------------------------|--------------------------|-----------------------------|
| 1. 535/オリーブ色シルト質 | 21. 7.361/10種灰岩質シルト | 41. 2.503/2種灰岩質シルト |
| 2. 534/10種オリーブ色粘土質シルト | 22. 535/10種オリーブ色粘土質シルト | 42. 355/14種オリーブ色 |
| 3. 7.364/同種灰岩質シルト | 23. 7.361/同種灰岩質シルト | 43. 1.502/14種オリーブ色粘土質シルト |
| 4. 506/14種オリーブ色粘土質 | 24. 7.373/12種灰岩質シルト | 44. 1.502/13種灰岩質シルト |
| 5. 2.504/同種オリーブ色粘土質 | 25. 2.531/10種オリーブ色粘土質シルト | 45. 103/14種オリーブ色粘土質シルト |
| 6. 7.364/同種灰岩質上 | 26. 2.531/10種オリーブ色粘土質上 | 46. 103/1オリーブ色シルト質粘土上 |
| 7. 2.504/10種オリーブ色粘土質シルト | 27. 530/10種オリーブ色粘土質シルト | 47. 103/1/10種シルト質粘土上 |
| 8. 535/14種オリーブ色粘土質 | 28. 7.362/2反ホリーブ色粘土 | 48. 7.361/オリーブ色粘土シルト質粘土上 |
| 9. 535/1オリーブ色粘土質シルト | 29. 7.353/1オリーブ色粘土シルトT10 | 49. 531/14種オリーブ色シルト質粘土上 |
| 10. 103/14種灰色地 | 30. 95/2反ホリーブ色シルト質粘土 | 50. 103/2/14種オリーブ色シルト質粘土上 |
| 11. 535/同種オリーブ色粘土上 | 31. 506/1オリーブ色粘土質粘土 | 51. 1.405/14種粘土シルト質粘土上 |
| 12. 103/14種色シルト質粘 | 32. 7.363/10種灰岩質シルト | 52. 7.393/14種オリーブ色粘土シルト質粘土上 |
| 13. 506/14種灰色地 | 33. 7.375/灰岩質 | 53. 103/1オリーブ色粘土シルト質粘土上 |
| 14. 2.504/同種オリーブ色粘土質シルト | 34. 95/5オリーブ色粘土 | 54. 56/14種灰色地 |
| 15. 103/14種オリーブ色粘土質シルト | 35. 506/1オリーブ色粘土シルト | 55. 7.393/14種オリーブ色粘土シルト |
| 16. 2.503/同種オリーブ色粘土上 | 36. 505/1オリーブ色粘土一層地 | 56. 7.393/14種オリーブ色粘土シルト |
| 17. 103/2/14種粘土質シルト | 37. 2.531/10種オリーブ色シルト | 57. 505/1オリーブ色粘土質粘土 |
| 18. 7.361/オリーブ色粘土質シルト | 38. 103/1/同種灰岩質シルト | 58. 505/1オリーブ色粘土質粘土 |
| 19. 7.361/10種灰岩質シルト | 39. 7.361/10種灰岩質シルト | 59. 103/2/オリーブ色粘土上 |
| 20. 103/1/同種灰色地 | 40. 505/1オリーブ色粘土上 | 60. 103/1/同種灰色地 |



96-1区南壁断面

61	1005/1褐色粘土	88	7.505/1灰オーリーフ色砂砾	101	1005/1灰灰白色～粉砂
62	7.505/1褐色粘土	89	1007/1灰白色砂砾	102	7.505/1褐色粘土
63	1006/1褐色粘土	90	1006/1灰白色砂砾	103	7.505/1褐色粘土
64	1005/1灰灰白色砂砾	91	7.505/1リード黄色砂砾	104	7.505/1褐色粘土
65	504/1褐色粘土	92	7.505/1リード灰色砂砾	105	7.505/1褐色粘土
66	7.504/1褐色粘土	93	7.505/1リード灰色砂砾	106	7.505/1リード黄色砂砾
67	7.505/1灰白色粘土	94	7.505/1リード灰色砂砾	107	2.503/1暗オーリー/灰白色粘土
68	1005/1褐色粘土	95	7.505/1リード黄色砂砾	108	504/1暗オーリー/灰白色粘土
69	30/2/1リード黄色砂砾	96	30/3/1リード黄色砂砾	109	2.503/1暗オーリー/灰白色粘土
70	7.505/1リード黄色砂砾	97	30/3/1リード黄色砂砾	110	2.503/1暗オーリー/灰白色粘土
71	7.505/1灰オーリーフ色～褐色砂	98	90/1/1リード黄色砂砾	111	503/1暗オーリー/灰白色粘土
72	30/3/1/2/3/4/5/6/7/8/9/10/11/12/13/14/15/16/17/18/19/20/21/22/23/24/25/26/27/28/29/30/31/32/33/34/35/36/37/38/39/40/41/42/43/44/45/46/47/48/49/50/51/52/53/54/55/56/57/58/59/60/61/62/63/64/65/66/67/68/69/70/71/72/73/74/75/76/77/78/79/80/81/82/83/84/85/86/87/88/89/90/91/92/93/94/95/96/97/98/99/100/101/102/103/104/105/106/107/108/109/110/111/112/113/114/115/116/117/118	100	90/1/1リード黄色砂砾	112	503/1暗オーリー/灰白色粘土
73	1003/1褐色粘土	99	97/1/1褐色砂砾	113	95/1/1褐色粘土
74	1007/1褐色粘土	100	98/1/1灰白色砂砾	114	1.502/1深色粘土
75	2.503/1/4/リード灰白色砂砾	101	1006/1リード黄色～褐色砂砾	115	1.502/1深色粘土
76	90/2/2/1リード砂砾	102	1007/1深色粘土	116	1.502/1深色粘土
77	90/1/1リード砂砾	103	90/2/2/1リード砂砾	117	2.502/1暗オーリー/灰白色粘土
78	2.503/1/4/リード灰白色砂砾	104	1001/1灰白色砂砾	118	1005/1深色粘土
79	2.503/1/4/リード灰白色砂砾	105	1001/1灰白色砂砾		
80	503/4/4/1リード黄色砂砾	106	7.505/1灰白色砂砾		

第2節 96-1区

1. 第1遺構面

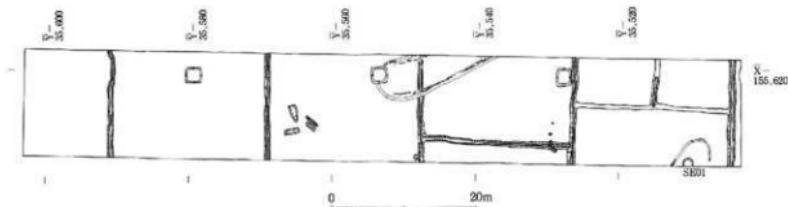


図4 第1遺構面

厚い洪水砂層下で条里型水田（南北方向畔6本、東西方向畔2本）、耕作痕、近世井戸、足跡等を検出した。南北方向の畦畔5本がほぼ等間隔に並び、その距離は平均21.6mで、条里区画の基本単位である10.9mの倍数21.8mに近似する。等間隔の南北畦畔の間を東西畦畔2本と南北畦畔1本で細分するが、調査区内で水田1筆を完全に検出することはできなかった。水田面の標高は9.76~10.01mである。水田の面を覆う第1層からは土師器、瓦器が出土した（図7-1~4）。土師皿（1）は口縁端部を軽くつまみ上げる。瓦器椀（3）は外面に指頭圧痕が残り内面にミガキ痕があるが、見込み部を欠き暗紋の形状は不明である。遺物の量は非常に少ないが、瓦器碗の特徴等からこの水田の時期は13世紀代と考えられる。

耕作痕は、半月状の掘り込みが2列に並ぶもので、その幅は約40cmある。過去の調査でカラスキ痕として報告されているものに類似する。⁽¹⁾ Uターンしている状態のものがSE101のまわりと、調査区北辺中央の2カ所で確認された。双方ともほぼ同じコースを2回通っており、切り合う部分もある。これは、こ

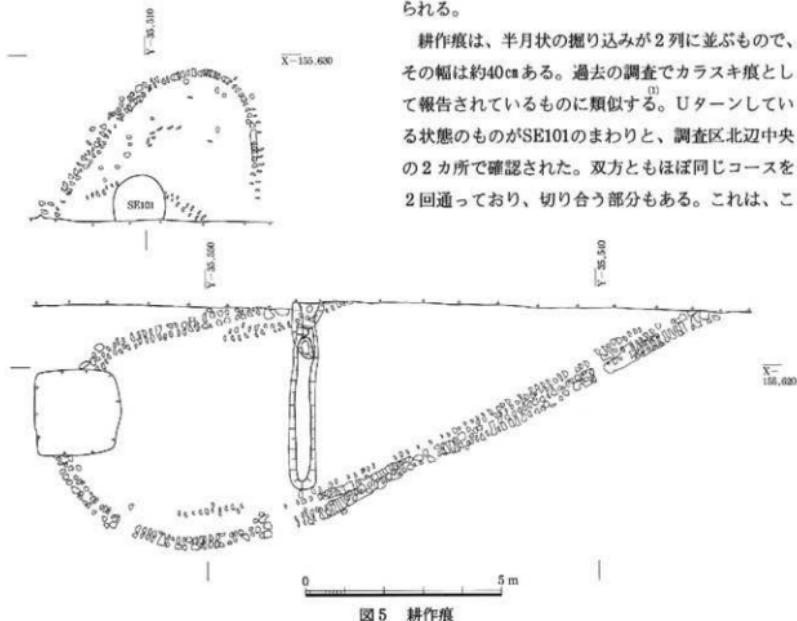


図5 耕作痕

の面の畦畔を切っている上、方向も条里の南北方向と異なる北東—南西方向であり条里水田より新しいと言えるが、耕作痕からの遺物の出土がほとんど皆無であるので時期は不明である。

SE101は調査区南辺東端付近にあり、堀形の径1.4m、深さ1.5m、径0.7mの樽を2段重ねて井戸枠とし、その下面から竹筒を湧水層まで打ち込んでいる。竹筒の下端はT.P.6.5m位まで達していて、調査中常に水が湧きだしていた。

井戸出土の遺物は瓦、染付、信楽すり鉢等がある（図7-5～11）。瓦は丸瓦と平瓦があり、調整はナデだが、一部布痕が残るものがある。4の小皿は重ね焼き時に高台が乗る部分を蛇の目状に軸をはぎっている。井戸の廃絶時期は18世紀末以降と考えられる。

(1)『志紀遺跡 大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会1995図版17等。

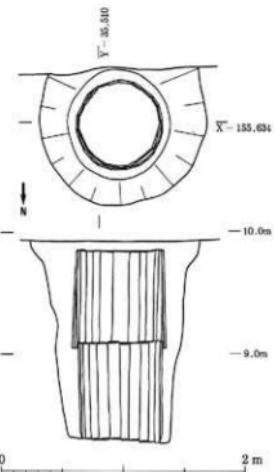


図6 SE101

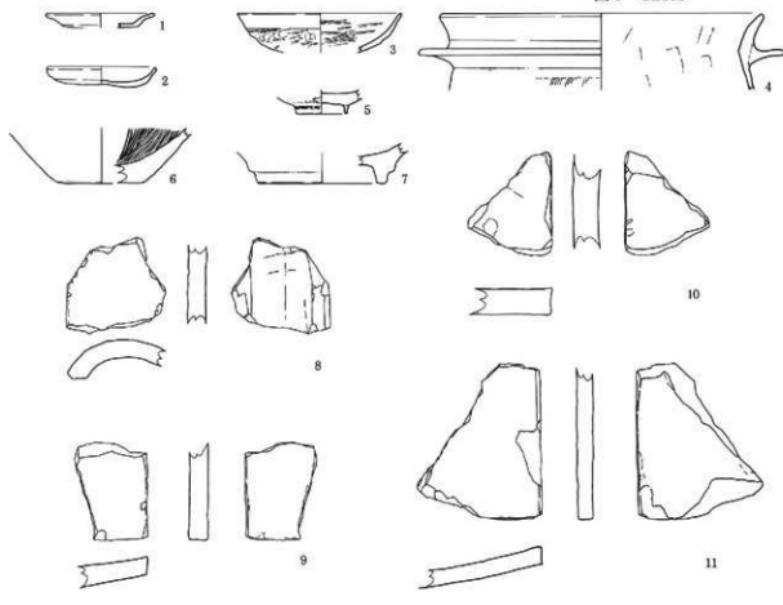


図7 第1層(1～4)・SE101(5～11)出土遺物

2. 第2遺構面

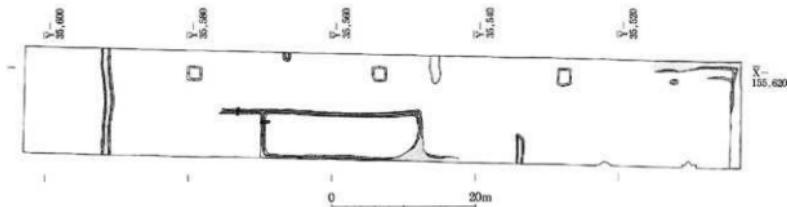


図8 第2遺構面

条里型水田（南北方向畔7本、東西方向畔3本）、足跡等を検出した。南北畦畔は第1面のものと近似した位置にあるが、7本のうち調査区内で連続するものは2本だけで、他は調査区中央まで達せず、途中で切れている。しかも、途切れるものは東西にずれて、南北直線上に乗らない。よって、遺構としては残っていないが、調査区内に東西方向の区画があったことが推測される。

東端の南北畦畔は、東端は調査区外に出るが、検出された部分の幅が0.8m以上の大規模なものである。この畦畔は（その3）調査区の東端で検出された南北方向の大畦畔に統くと思われ、歴史地理学的研究で復元された志紀郡条里の里境に一致する可能性が高い。水田の筆数は不明だが、四方を畦畔に囲まれる水田は1筆検出でき、東西21.7m南北5.5mである。南北畦畔間の距離は、通例どおり10.9mの倍数になる場合が多い。この面の標高は9.27~9.63mである。

第1・2遺構面の間には第2層暗オーリープ灰色シルト質粘土と第3層暗緑灰色粘質シルトが堆積しており、それぞれ須恵器・土師器・瓦器・黒色土器などが出土した。第9図1~25が第2層出土遺物である。1は須恵器壺の小片である。2~5は土師器壺で、外面には指頭圧痕が多く、内面にはミガキ痕が残る。6~10は土師器小皿で、8のみが所謂「て」字状口縁である。11~14は瓦器小皿で、12~14には格子状ミガキをほどこす。15~18は瓦器椀である。19~21は黒色土器A類である。22~25は黒色土器B類である。

26~50は第3層出土土器である。26は白磁碗IV類で、浅黄色の釉が厚く、一部玉縁をこえて滴下している。27は須恵器壺である。28~34は土師器小皿で、面取りするものが多く、「て」字状口縁もある。35~40は土師器壺で、外面には指頭圧痕が残り口縁部はヨコナデする。41は土師器甕で、外面はナデ、内面はケズリ、口縁部はヨコナデを行う。42~44は黒色土器A類、45は黒色土器B類である。内外ともミガキ、外面には指頭圧痕が残るものもある。46から50は瓦器碗である。46は大和型瓦器碗、50は平行ミガキがほどこされる。

51・52は和同開珎で、52は2面直上で出土したが、畦畔等に伴うものではない。西端の南北畦畔の13.5m東で出土した。51は調査区西端の排水用側溝掘削時の出土で、2層または3層に属するがどちらか特定できない。

53は第3層（粘土質シルト）上面で出土した馬鍔の歯である。長さ19cm、幅最大1.8cm、最小1cm、厚さ最大1.2cm、最小0.7cmであり、角棒状の鉄素材を折り曲げて整形している。

以上の土器の下限は12世紀前半頃にあると思われ、水田面の時期もその前後に位置づけられよう。

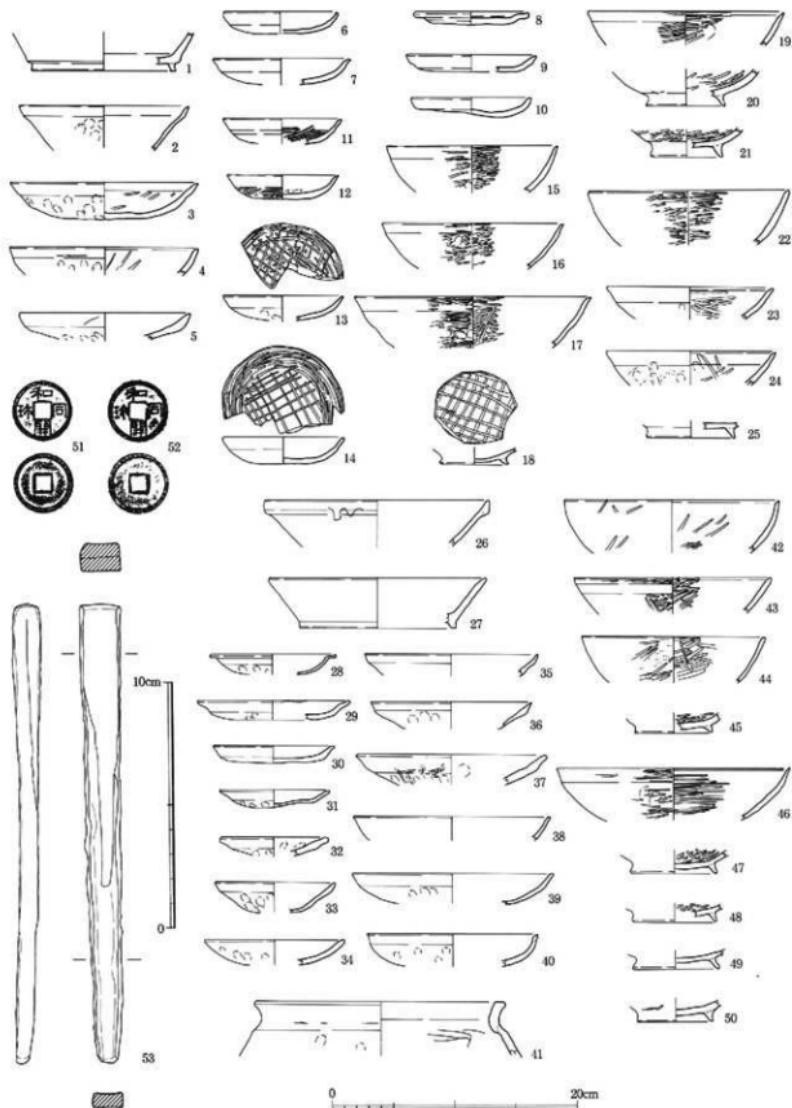


図9 第2層（1～25）・第3層（26～53）出土遺物

3. 第3遺構面

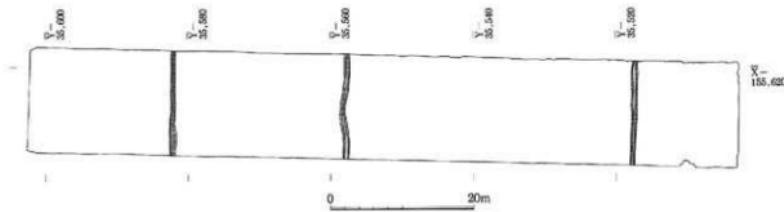


図10 第3遺構面

条里型水田（南北方向畦畔3本）、足跡等を検出した。西畦畔と中央畦畔の距離は約24.1m、中央畦畔と東畦畔の間は40.3m、いずれも10.9mの倍数ではない。また、第3面で確認した畦畔は、第1・2面で確認した畦畔と位置が異なる。第2面との間で時期差がかなりあり、この間に土地利用における西期が推定できる。第3面までが条里水田面である。第3面の標高は、8.91~9.36mである。なお、この面の足跡埋土はこれまでの砂と異なり粘土であったため、検出が困難であった。これは調査当時は足跡と判断したが、単なる土壤化の違い、生痕等の可能性もある。

第2面のベース層で第3面を覆う第4層（暗緑灰色粘土）から須恵器・土師器その他の遺物が出土した。1~6は須恵器である。1は巻の口縁部で、2条の突帯の間に波状紋を施す。2は杯蓋で上面は肩部まで回転ヘラケツリを行う。3~6は壺身である。古墳時代のものと律令様式のものがある。7~19は土師器杯である。7~12は内面ナデ、外面は指頭圧痕を残す。10~12は高台をもつ小さい底部からななめに立ち上がる。13~19は内面に暗紋を施すもので、口縁部はいろんなバラエティをもつ。20は平瓦で凹面には布目が残る。

21は鉄鎌で、全長149mmである。頭部は偏平な三角形で幅9.0mm、厚さ2.6mm、頸部は断面方形で長さ94mm、茎も断面方形で長さ32mmである。22は鉄鎌である。先端部は欠損している。基部の幅は32mm、残存長94mmである。22は漆塗りの木片である。両面に黒色の漆を塗る。厚さ6mm、残存長さ109mmである。容器かなにかの部材であろうが詳細不明である。4層から出土した土器は古墳時代後期から9世紀に至るものであり、第3面の水田は9世紀代のものとみられる。

4. 第4遺構面

畦畔、土坑、足跡等を検出した。この面は上面の東部を洪水砂でパックされており、その部分では遺構の検出は比較的容易であった。畦畔は残存状態が悪く、高まりが検出されたところは一部にとどまり、大部分は土色の違いおよび足跡分布の疎密からその存在が推定されたものである。地形の傾斜に直交す



図11 第4遺構面

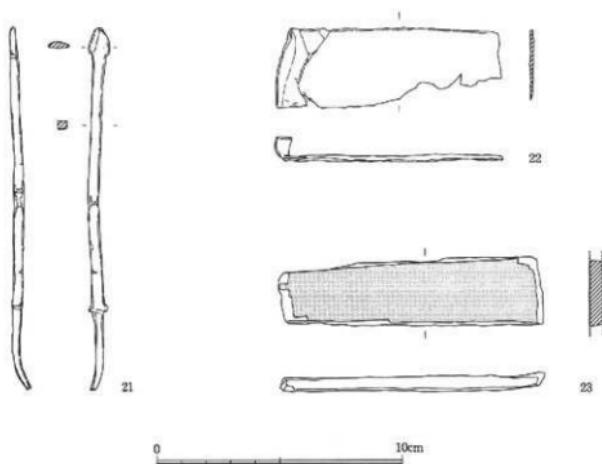
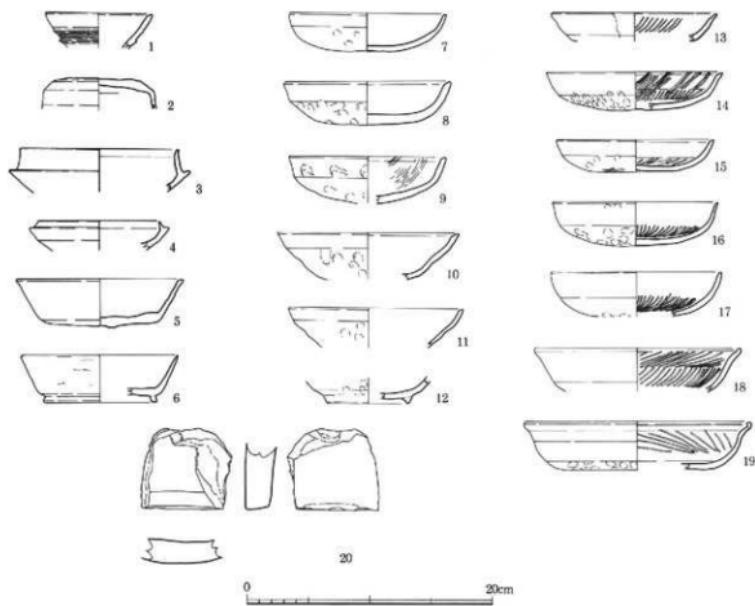


図12 第4層出土遺物

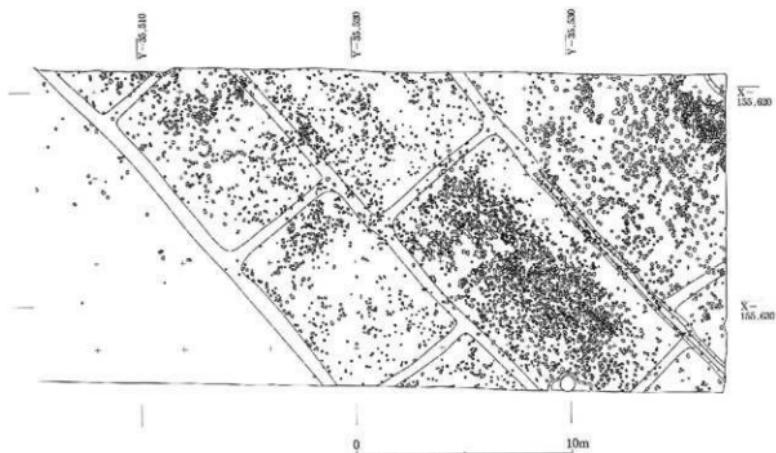


図13 東端部畦畔と足跡

る幹線小畦畔が北西—南東方向に、傾斜に平行する支線小畦畔が北東—南西方向に検出された。水田の形状は長方形で、幅6.5~7.5m、長さ8.8~13.8mである。また、調査区北東端では大畦畔も検出された。排水用側溝に切られたため図には一部しか表示していないが、断面観察から幅1m、高さ20cmになることが確認された。

調査区中央部では遺構の検出ができず、足跡もほとんど存在しない。しかし、水田が検出された範囲は洪水砂の分布とほとんど一致することから、本来はこの部分にも水田がつくられていた可能性は否定できない。

調査区西端には土坑、ピットが散在し、SK401からは土師質瓶の下半部が出土した。長径1.05m、短径0.9mの楕円形で、深さは0.35mである。埋土は上部が灰オリーブ色粘土、下部は暗オリーブ灰色粘土、瓶の下層からウリ科の種子が多く検出された。性格は不明であるが、水田になんらかのかかわりがあるものであろうか。この面の高さは8.71~9.19mである。

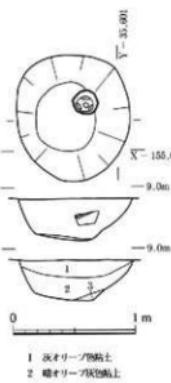
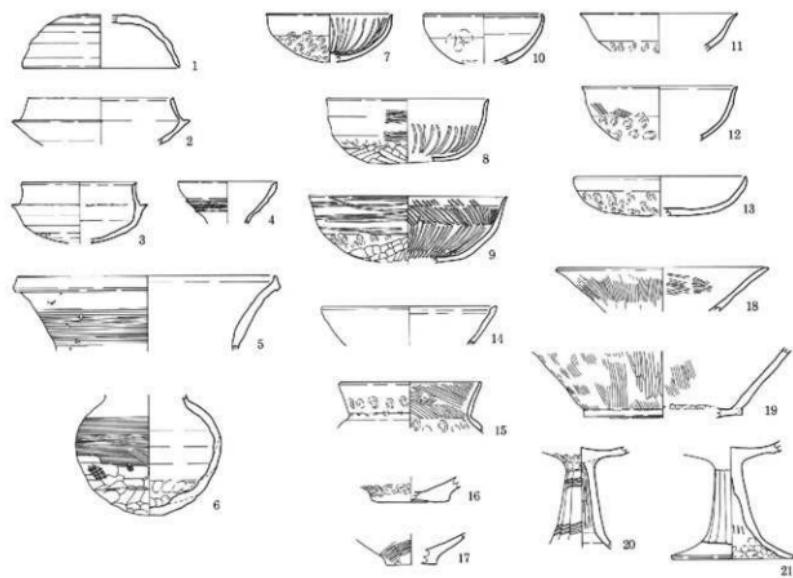


図14 SK401

第4面を覆う第5層オリーブ灰色粘質シルト、第6層青灰色砂礫から須恵器・土師器が出土した。1~21が第5層出土土器である。1~6は須恵器で、1は壺蓋、2・3は壺身である。4は甌の口縁部で2条の突帯の間に波状文を施す。5は壺、6は甌の体部で底部にはケズリ痕が残る。7~13は土師器碗・壺である。9・10は底部にケズリ痕が残る。14~21は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。

22~32は第6層出土土器である。22~24は須恵器で、蓋の天井部と身の底部は回転ヘラケズリを行う。26~32は土師器および弥生式土器である。26の甌の口縁端部は上方につまみ出す。

33はSK401出土の甌である。調整は外面は縦方向のハケ、内面は縦方向のケズリである。底部中央に円孔1個、外周に楕円形の孔3個を穿つ。これらの土器は弥生時代後期から7世紀前半に及ぶもので、水田の時期は7世紀代と考えられる。



0 20cm

(SK401)

図15 第5層（1～21）・第6層（22～33）出土遺物

5. 第5遺構面

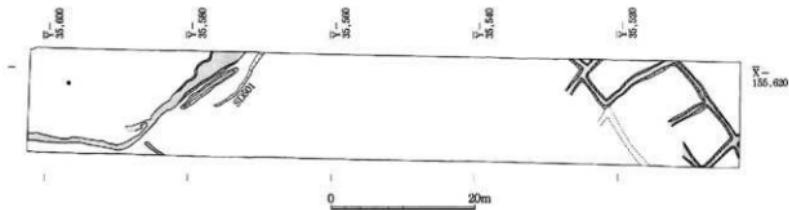


図16 第5遺構面

畦畔、大畦畔、溝、足跡等を検出した。調査区東端部は砂層で覆われているため、畦畔や足跡を良好な状態で検出した。1筆がほぼ完全に検出された水田は正方形に近い形（約6m×6m）をしている。足跡群西辺南半には帯状に足跡がない部分があり、畦畔の痕跡と推定される。調査区中央部は砂層で覆われていないため、第4面と同じく畦畔は検出できなかった。

一方、調査区西半では、大畦畔とそれに伴う溝を検出した。大畦畔は東端部で幅約1.6mであるが、次第に細くなり、高さも低くなり、中央から西側にかけては土色の違いからそのプランを検出するにとどまる。畦畔が立体的に検出できる部分では東南側に部分的に二段堀りの溝を伴う。この溝は東端で幅約2.2m、西に行くと次第に広がり最大3.8mに達する。深さは約25cmだが、西に向かって次第に浅くなり、畦畔の高まりが残っていない部分で消失する。

畦畔および溝の東南肩部に沿って多くの杭が打たれている。中には直径25cmもの太さのものが2本あり、検出時には柱の可能性も考えたが、孤立した存在で建物を復元できず、掘形も検出できないため杭

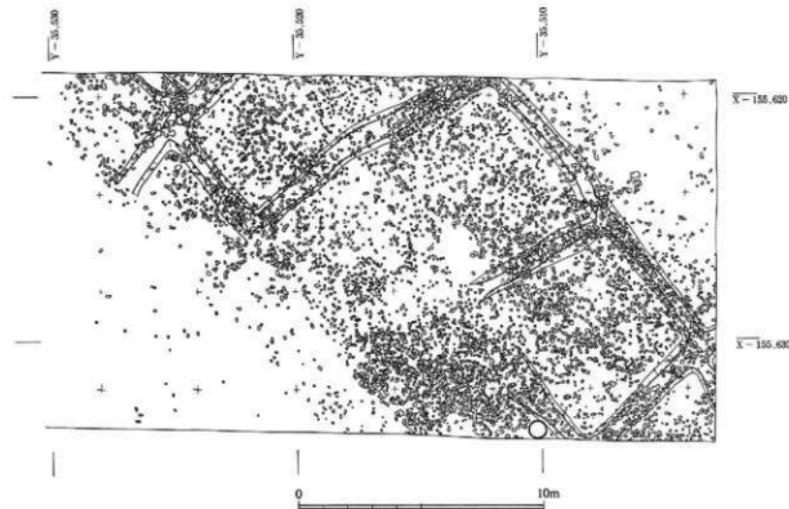


図17 東端部畦畔と足跡

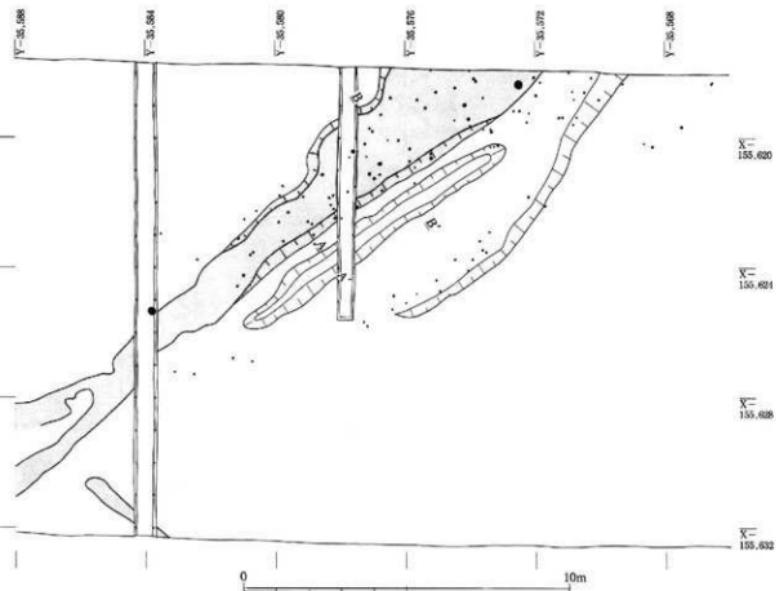


図18 大蛙群と杭群

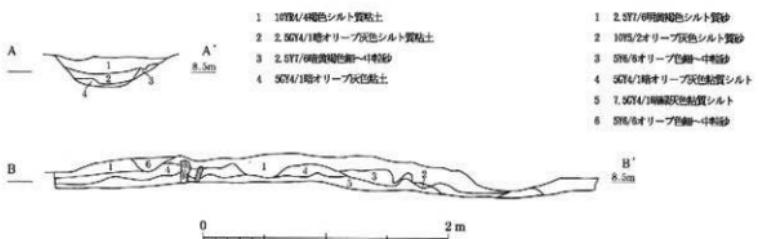


図19 大蛙群・S D510断面

と判断した。しかしながら、図21-16は底部を平坦にしており杭とは考えがたい。それにしても、堀形が検出できないのも事実である。

この蛙群は7面の溝DS701の北に接する部分の直上に当たり、この溝が埋没した後のたかまりを利用していると考えられる。またこの高まりは砂層であり、それを補強するために多くの杭が打たれたものと推定できる。第5面の標高は8.52~9.02mである。

第5面を被覆する第7層（暗オリーブ灰色粘土）、第8層（青灰色砂礫）からは須恵器・土師器のほか鐵鎌・石鎌が出土した。8はSD50113・15は第8層、残りは第7層から出土した。1・2は須恵器坏蓋である。天井部に回転ヘラケズリ痕を残す。3は土師器坏で外面に指頭圧痕を残す。5は精選された胎土の精製鉢である。8は広口壺で唯一の遺構出土品である。10~13は土師器壺、14~16は甕である。

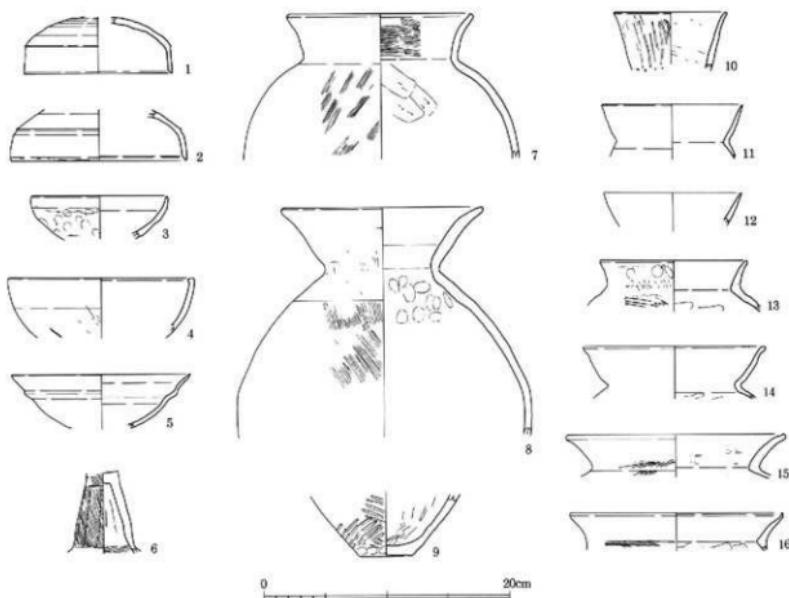


図20 第7層・第8層出土遺物

第5面の時期は、これらの土器の下限である6世紀前半にあると思われる。

17は尖頭器である。縦長のサヌカイト剝片を粗く調整して製作している。長さ49mm、幅23mm、厚さ6mm、重さ7.6gである。18は鉄鎌である。長さ151mm、基部の幅24mm、刃部の幅15~17mm程度である。

図22-7は何の部材かわからないが、抉り部に釘孔をあけ木釘を差し込んでいる。これ以外の図21・22に示したものは杭として打ち込まれていたものである。杭は断面の形と先端の削り方により分類される。断面は円形、半円形、扇形（蜜柑割り）、角、板状の5種類ある。角材と板状のものは建築部材などの転用とみられる。先端は鉛筆状に削るものが最も多い。一方向から削る片刃状のもの、対面する二方向から削る両刃状のものもある。板材や偏平な角材では先端部の隅を削り取る。これも一方だけ削るものと両方削るものがあり、片隅切・両隅切と呼ぶ。第21図14は大畦畔東北隅で検出した大型の杭で、面取りを行い、先端は両刃状に削る。第5面では74本の杭を検出した。その内訳は表1に示す。

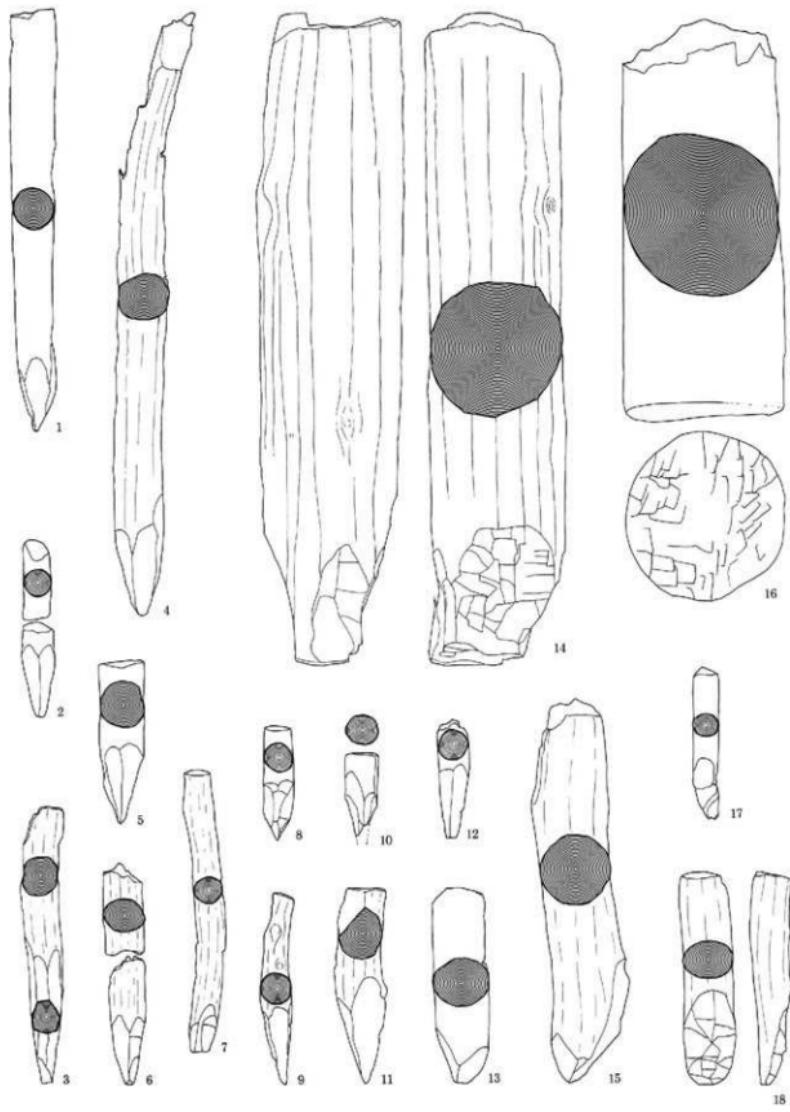


图21 第5面出土杭

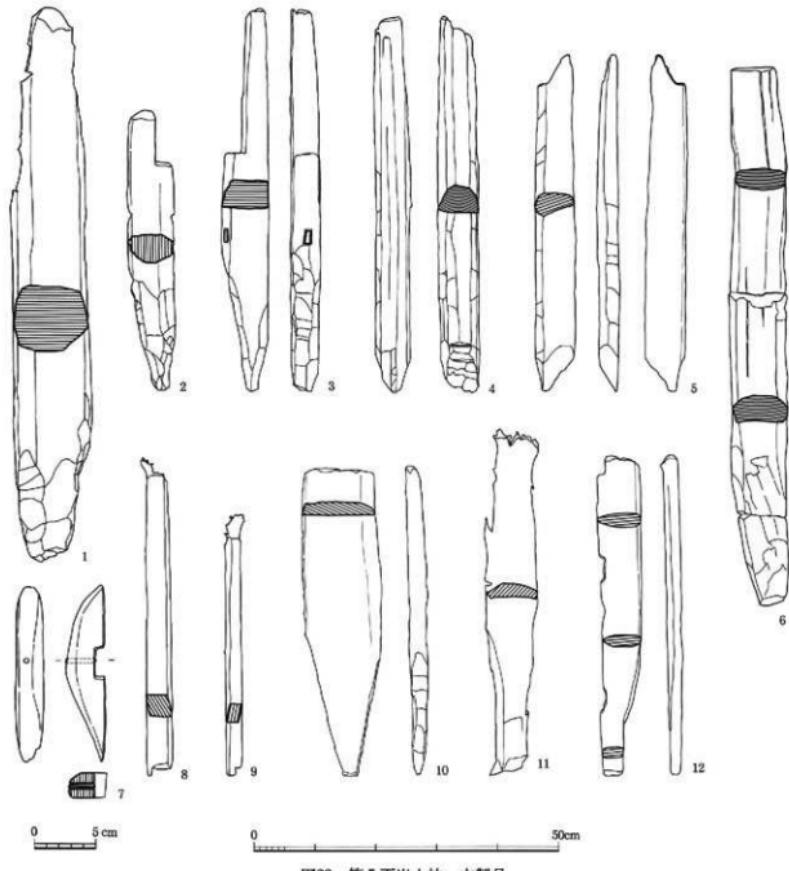


図22 第5面出土杭・木製品

表1 第5遺構面出土杭集計表

	円	半円	扇形	角	板状	不明	計
鉛筆状	34	2		2		1	39
両刃状	5			1			6
片刃状	6			1			7
両隅切				2	2		4
片隅切				1	2		3
その他	1			1			2
不明	10		1	3		1	15
計	56	2	1	11	4	2	76

6. 第6遺構面

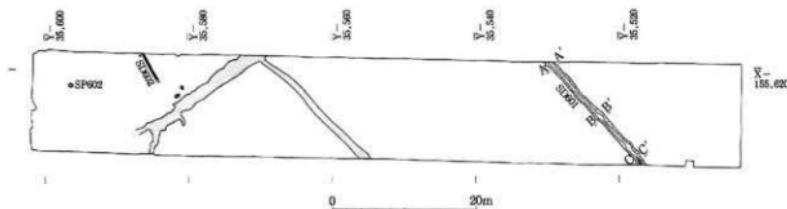


図23 第6遺構面

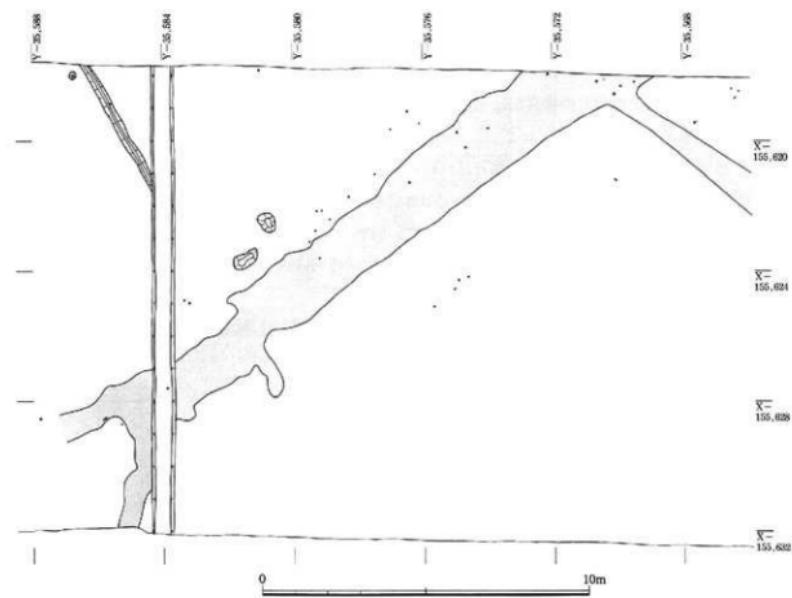


図24 大畦畔と杭群

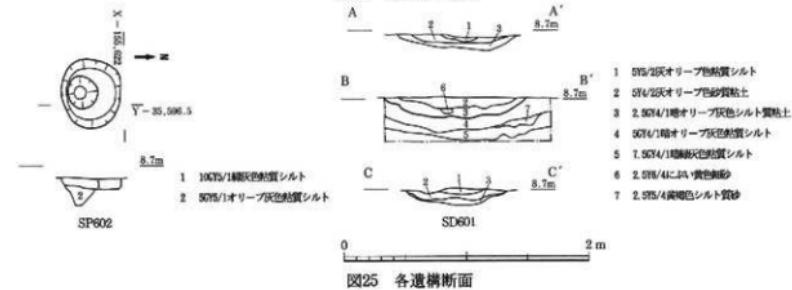


図25 各遺構断面

東端部では、第5・6面ほどではないが足跡群を検出した。畦畔は、明確には確認出来なかつたが、足跡の存否から長方形（約10m × 7m）の水田があつたと推定できる。

溝（SD601）は足跡の分布する範囲の西にあり、地形にそう。

（幅1m、深さ20cm）南東から北東に流れていたと推定する。

調査区西側の大畦畔は第5面と同じ位置に築かれている。7面の溝SD701の北に接する位置にあり、第5面の大畦畔と同じ現象により形成されたと推定できる。この面でも大畦畔に伴つて杭列を検出した。しかし、その位置を見ると畦畔から外れるものも多く、本来第5面に属するものの上部が腐朽して第5面で検出できなかつたものがある可能性も否定できない。

また、これに接続するよう北西—南東方向の畦畔も確認できた。SD601と平行する。大畦畔との接続部は明確に検出できず、接続するか水口になるかは不明である。

ピットは大畦畔に近接して2個と、調査区西端に1個があるが、その性格はわからぬ。面の高さは8.486～8.835mである。

第6面を覆う第9層から土器と木製品が出土した。図26-1は輪かん型田下駄の足板である。緒孔は3孔、両端に紐孔が2孔ずつある。全長303mm、前壺と後壺の間は134mm、後壺間の幅は63mmである。2は農工具の柄の部分か。残存長178mmである。

図27-1～2は須恵器坏蓋、3は坏身である。4～7は土師器壺の口縁部である。4は第7層から同

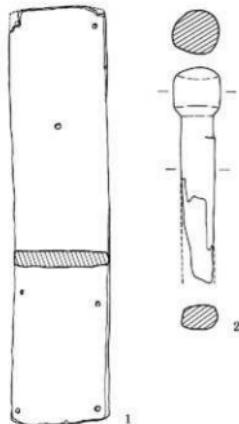


図26 第9層出土木製品

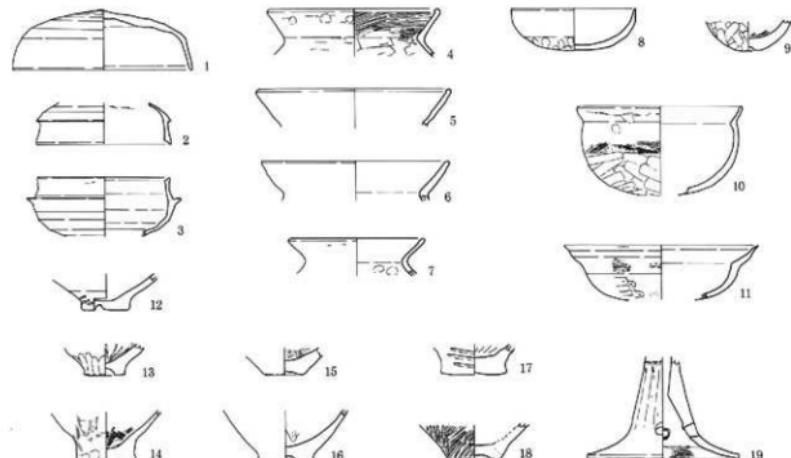


図27 第9層出土土器

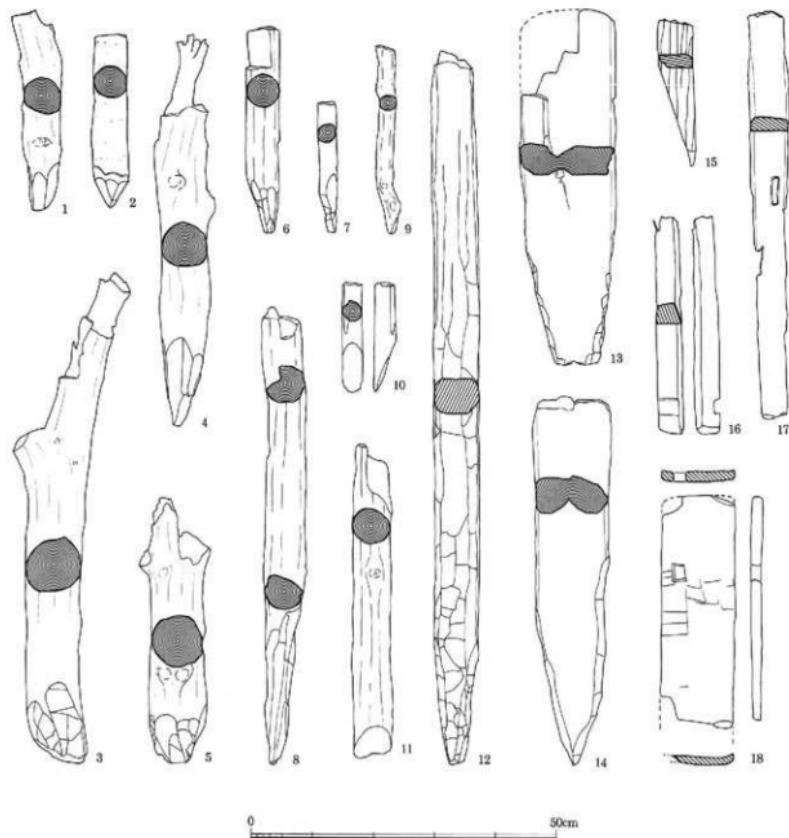


図28 第6面出土杭・木製品

一 個体の破片が出土しており、農耕による搅拌状態の一端を物語る。8は土器器坏、9~11は鉢で、体部下半にヘラケズリ痕が残る。12~18は壺・甕の底部で上げ底状のものやタタキ痕を残すものがみられる。以上の土器は弥生時代後期から古墳時代のもので、第6面の時期は5世紀後半頃とみてよいだろう。

第6面では22本の杭を検出した。第5面に比べ数は少なく、断面半円形や扇形のものはない。16~18のように何かの部材を転用したものもみられる。内訳は右表に示す。

表2 第6面遺構面出土杭集計表

	円	角	板状	計
鉛筆状	9	2		11
両刃状				
片刃状	5			5
両隅切			1	1
片隅切				
その他	3			3
不明	1	7	2	5
計	17	2	3	22

7. 第7遺構面

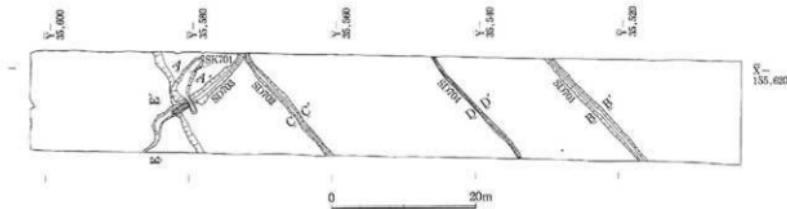


図29 第7遺構面

溝4条、土坑等を検出した。溝は西北—東南または東北—西南方向のものである。SD701は第6面SD601の下にあり、幅1.3m、深さ0.2mである。SD702は第6面の北西—南東方向畦畔下にあり、幅0.9m、深さ0.2m弱である。SD703は6面大畦畔下にあり、広いところでは幅1.5m前後あり、深さは浅く10cm程度である。SD704はSD701とSD702の間にあり、他のものより細く、幅30~40cmのものである。

土坑はSD703と切り合っているが、両者の埋土は酷似していて、その先後関係は確認できなかった。土坑の西側には東に向かう段落ちがある。この面では畦畔などは検出できなかったが、土壤分析の結果から水田耕作が行われていた可能性が大きい。面の標高は8.836~8.645mである。

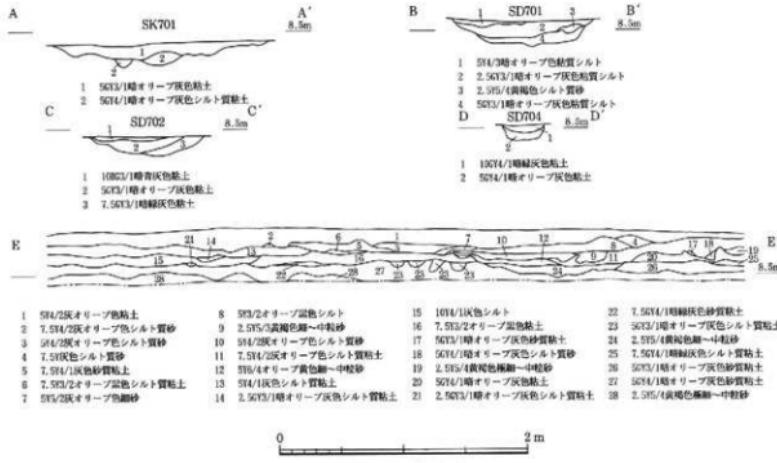


図30 各遺構断面

第7面を覆う第10層から弥生時代後期から古墳時代前期の土器と木片、石包丁などが出土した。1は複合口縁壺である。内外とも丁寧にみがいており、屈曲部に竹管文をもつ円形浮文をつける。2・6は長頸壺で口縁部外面は縱方向のミガキを施す。8は甕体部でタタキ痕が残る。9・10は高杯である。内外ともミガキ。11~14は甕の口縁部である。13は外面ミガキ、14は搬入品であろう。15は加工痕がある木片である。第10層の土器は弥生時代後期のものが多いが、布留式土器もあり第7面の時期は古墳時代前期とみられる。

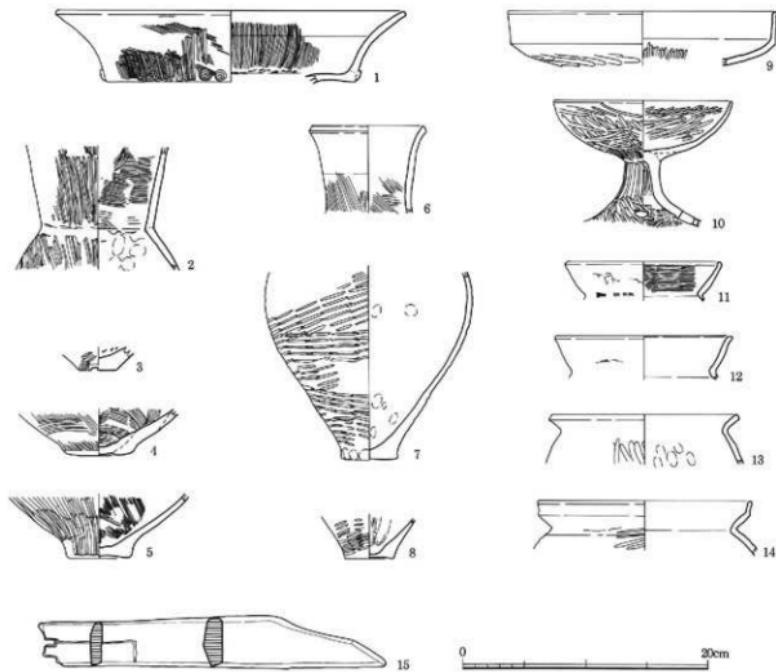


図31 第10層出土遺物

8. 第8遺構面

第7面と第9面の間に第11・12層が堆積するが、11層は調査区の東半のみに存在し、その下面が第8面である。つまり第8面は調査区東半のみに存在し西半は第7面につながる。

東南—西北方向の溝SD802はSD701にはばかさなる。調査区北東端のSD801は蛇行する細い溝である。この2本の溝以外に遺構らしい遺構はない。この面の高さは8.395~8.564mである。

11層とSD802からごく少量の土器が出土したが図化困難な細片である。タタキ痕のある甕片の存在から弥生時代後期と判断した。

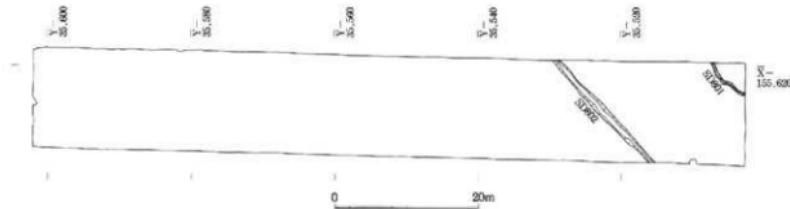


図32 第8遺構面

9. 第9遺構面

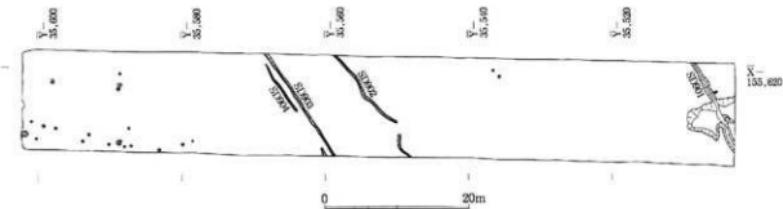


図33 第9遺構面

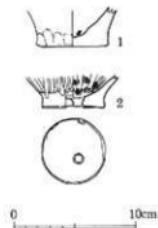


図34
第12層出土土器

10. 第10遺構面

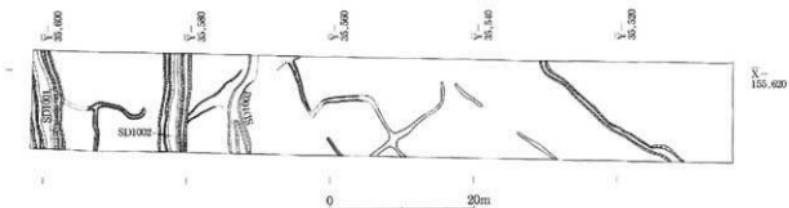


図35 第10遺構面

調査区西端には、溝をはさむ2条の大畦畔が約20m間隔で2組存在する。両者はほぼ南北方向に走り、その間は蛇行する小畦畔で区画する。大畦畔の幅は1~1.5m、間の溝は幅1.5~2m、あわせて4mを超える大がかりなものである。大畦畔周辺には足跡が多数残っている。西大畦畔では溝の底にも多くの足跡が残る。東大畦畔の西辺にそって幅2m位の帯状に足跡がない部分があり、小畦畔もこの部分で消えている。何らかの土地利用形態を反映したものと思われるが、具体的には分からぬ。

東大畦畔から東北方向に幅広い畦畔が伸び、蛇行する溝に向かう。この畦畔の中央付近にとりつく南北方向の耕作痕がある。半円形の鋤痕が連続するものである。この付近にも足跡があるが、大畦畔の間とは異なり散漫に分布する。

大畦畔の東には途中で合流して蛇行する南北方向の溝があり、その東一帯にはおおむね東南—西北方向の畦畔がある。畦畔の方向は大畦畔に近い西側では南北方向に近く、東に行くにしたがって南北方向からの傾きが大きくなる。東端の幅広のもの以外は畦畔の残存状態はよくなく、水田一筆の形が明らか

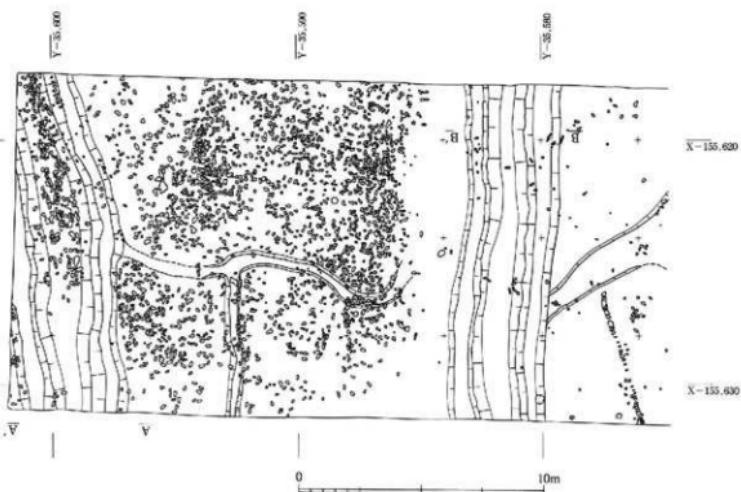


図36 西端部畦畔と足跡

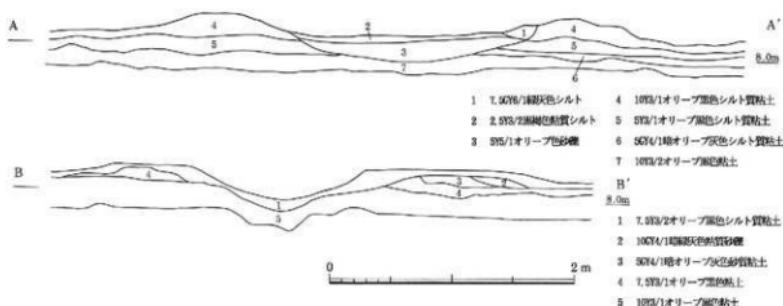


図37 大畦畔断面図

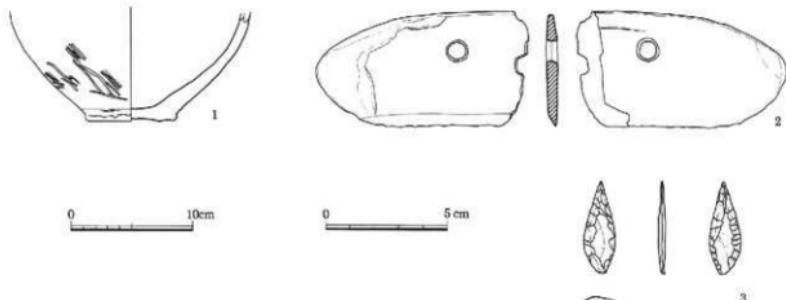


図38 第13層出土遺物

なものはないが、地形の傾斜に合わせて小区画水田が展開していたのであろう。遺構面の高さは8.10～8.30mである。

第10遺構面を被覆する第13層からは、ごく少量の土器・石器が出土した。1は壺の体部下半で、底面にはモミ痕が残っている。2は石包丁で綠色片岩製、直線刃片刃、残存長86mmである。3は石鎌は重さ1.31gの小型のものである。土器は弥生前中期ないし中期初頭かと思われる。第11面が前期中段階～新段階とみられることと、今回の調査でⅢ様式土器の出土がないことから、この面の時期は中期初頭前後と考えられる。

11. 第11遺構面

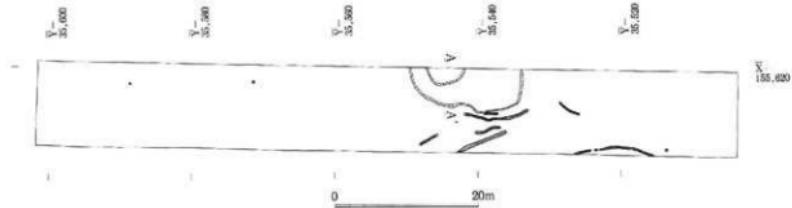


図39 第11遺構面

遺構の分布は散漫である。調査区中央部の北辺で落ち込みを検出した。一辺約16mの隅丸方形で、中央部は二段に落ち込むが、深さは最大20cm強の浅い皿状のものである。落ち込み内から石包丁が出土した。

落ち込みの南側一帯で溝状遺構を数条検出した。幅20cm程度の細いもので、人為的な遺構であるかどうかは断定できない。この面の高さは7.91～8.21mである。

第11面を覆う第14層からは弥生第I様式土器と突帯文土器および石包丁、サヌカイト製石器、剝片が出土した。

1～11は突帯文をもつ壺である。突帯は口縁部からやや下がった位置にめぐり、刻み目はD字形の粗いものである。口縁端部は軽く平坦に調整する。肩部にも刻目突帯が巡る。肩部の屈曲は弱い。肩部突帯から上の外面はナデ、下はケズリ痕が残る。2・7・8・9、3・4・7、5・11はそれぞれよく似た胎土で、直接接合はできないが同一固体の可能性がある。すべて生駒西麓産とみられる。

12～24はI様式の土器である。12は壺の蓋と考えたが細片であり明確ではない。13～15は壺で、14・15は一条の沈線が巡る。13は如意状口縁だが刻目はない。16～21は壺である。肩部には多条沈線を施す。21は沈線の間に竹管の刺突を伴う。23は壺の体部下半である。

25は落ち込み内から出土した石包丁である。綠色片岩製で外弯刃両刃、孔の部分で折損している。残存長76mmである。26は14層出土の石鎌である。サヌカイト製で長さ47mm、重さ3.36gである。27はスクレイバーか。片面は自然面を残す。

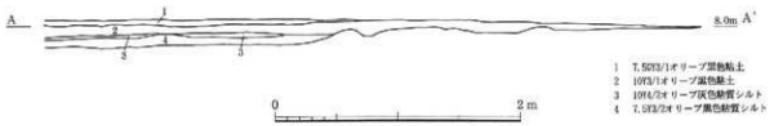


図40 落込み内断面

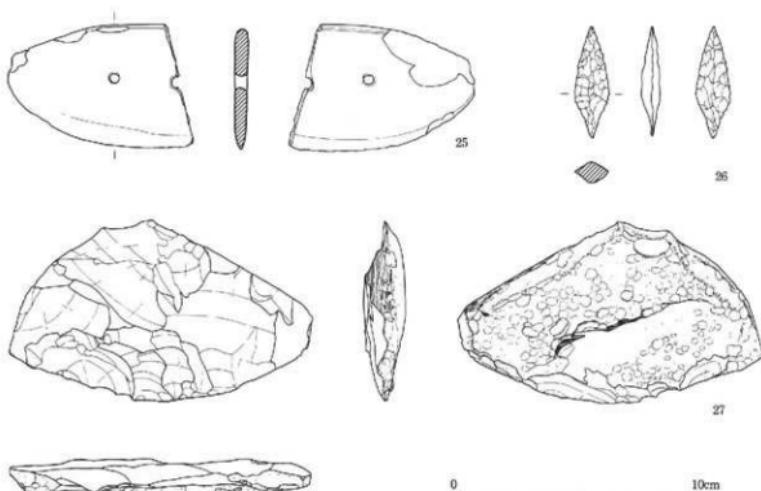
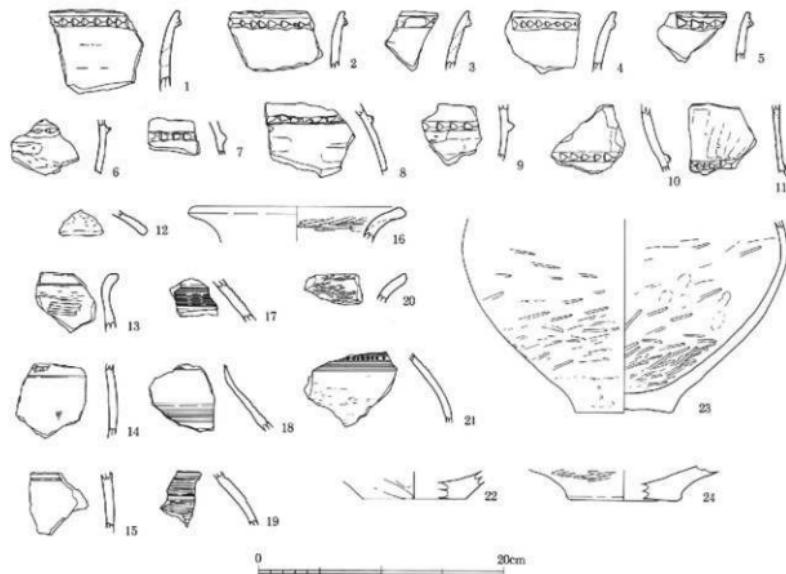


图41 第14层出土遗物

12. 第12遺構面

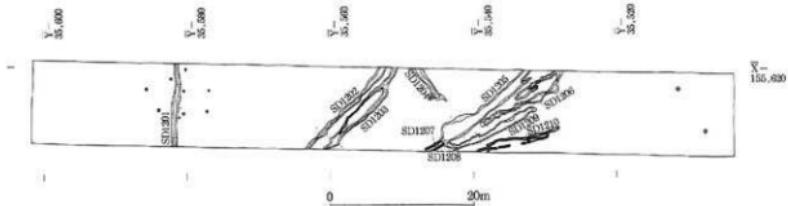


図42 第12遺構面

第10面SD1002の真下で南北方向の溝を検出した。その周りにピットがあり、溝の東の5個のピットは北東隅の柱穴を欠くものの、溝と方向を同じくする 1×2 間の建物跡である可能性がある。しかし、柱間は梁桁約3m、桁桁約3.3mと間隔が広く、本格的な屋根を乗せることは困難である。

調査区中央部では、北東—南西方向の溝を検出した。この方向は、上面で検出した多くの溝と直交する関係にあり、堆積環境の変化が推定できる。溝の幅は1m前後、深さは10cm以内の非常に浅いものである。その埋土は、炭酸鉄を含む砂混粘土が多い。東側で唯一の、北西—南東方向の溝では、その先端に植物遺体の集中する部分があった。面の高さは7.795~8.039mである。

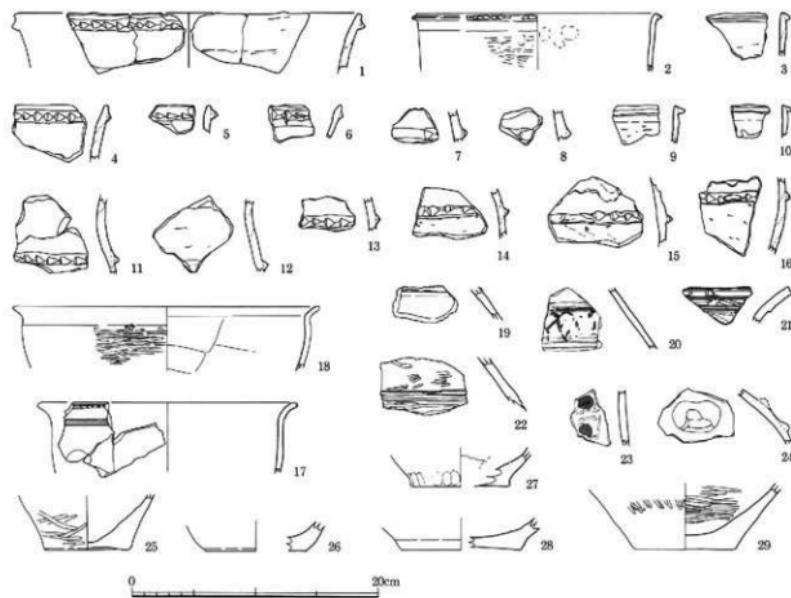
第12面を被覆する第15層からI様式土器、突帯文土器、石器が出土した。1~16は突帯文土器である。粗い刻み目突帯を口縁部のやや下と肩部に巡らすもの（1・4~8・11~16）と、口縁部に接して細い突帯を巡らすもの（2・3・9・10）がある。前者は第14層のものと同様に口縁端部を平坦に調整し、肩部で屈曲しない。後者は浅い横長の刻み目をもつもの（2）と、刻み目をもたないものがある。

17以下はI様式土器で、甕は口縁端部下寄りに刻み目を施し口縁部下に2条の沈線を巡らす。壺は削出し突帯を持ち、赤彩を施すものや浮文をもつものがある。19の赤彩は保存状態がよくないが斜格子文であろうか。

サヌカイト製石鎌は長さ39mm、重さ3.41gである。打製石剣は長さ201mmである。基部の刃潰しをしていない。石包丁は凝灰質頁岩製で刃部の稜線は片面は明瞭だが片面はにぶい。



図43 各遺構断面



0 20cm

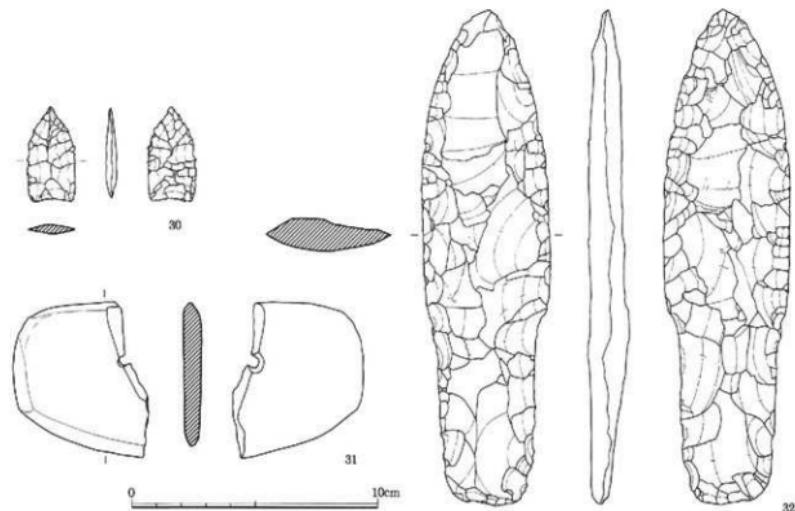


図44 第15層出土遺物

13. 第13遺構面

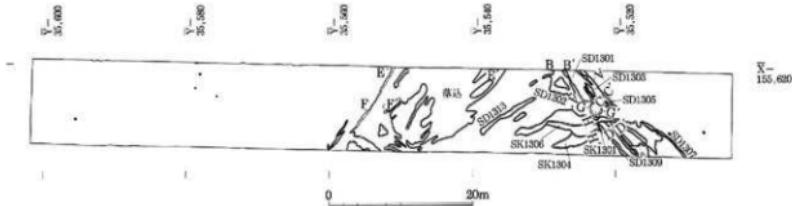


図45 第13遺構面

調査区東半には落ち込み、溝などがある。中央部に西南一東北方向の幅広い落ち込みがある。幾つかの幅広い溝の集合のようでもあるが明確でない。西辺沿いはやや深く明瞭な溝である。

落込みの東には東南—西北方向、あるいは東西方向の溝や土坑がある。溝は12面と同じく浅く幅広いものである。これらの落込みや溝は配置や形態がきわめてランダムであり、人為的遺構かどうか疑問が大きい。調査区西半にはほとんど遺構がない。面の高さは7.65~7.96mである。

13面を覆う16層および13面の遺構から弥生前期土器と突帯文土器、サヌカイト製石器・剣片が出土した。突帯文土器はほとんどが口縁端部に接して突帯を貼りつけるものである。口縁部上端に面をとり断面三角形ないし台形の突帯を貼りつけるもの（1・5～12）と、突帯と口縁部の整形を同時にい、口縁内径を頂点とする断面三角形の突帯をつくるもの（2・6～8）がある。前者は浅い刻み目を施すものと刻み目を持たないものがある。弥生土器の甕は口縁端部の全面に刻み目を施し口縁部下には2～3条の沈線を巡らす。サヌカイト剣片も出土し、なかには多少調整して刃部をつくるものがある。

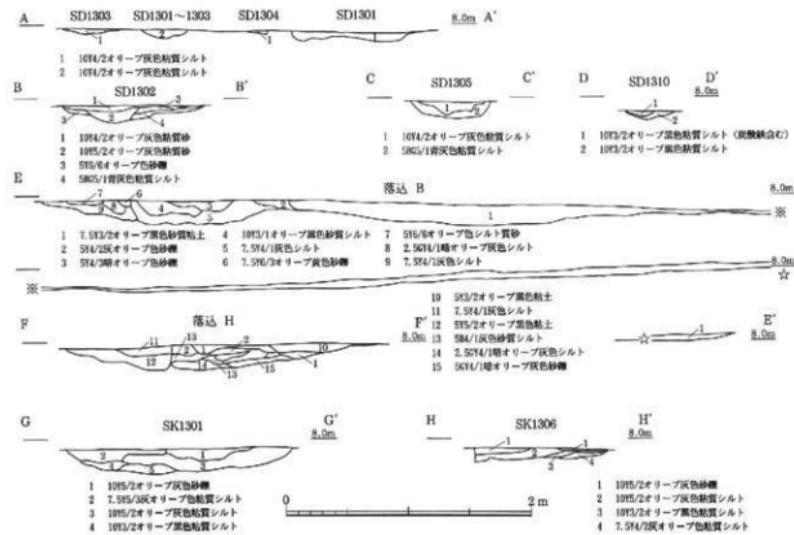
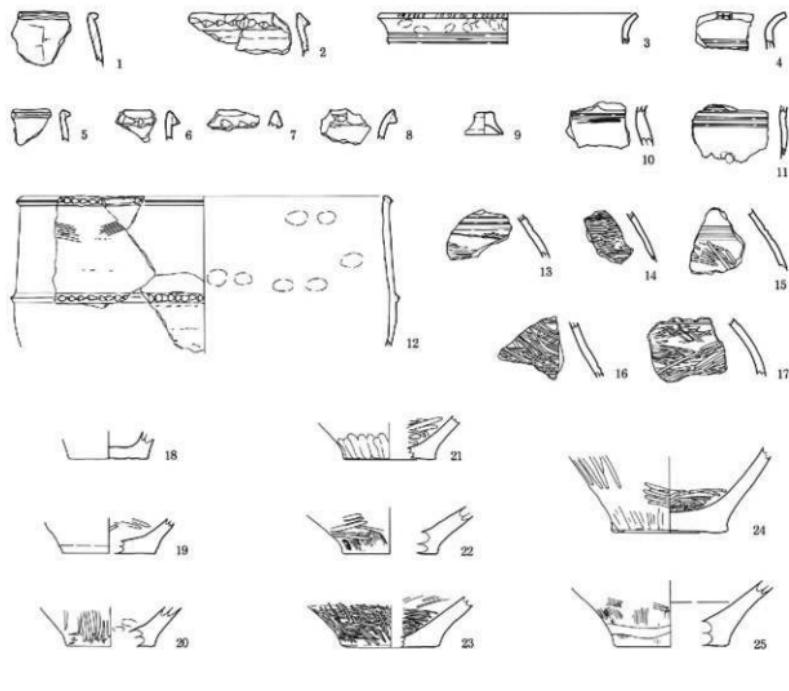
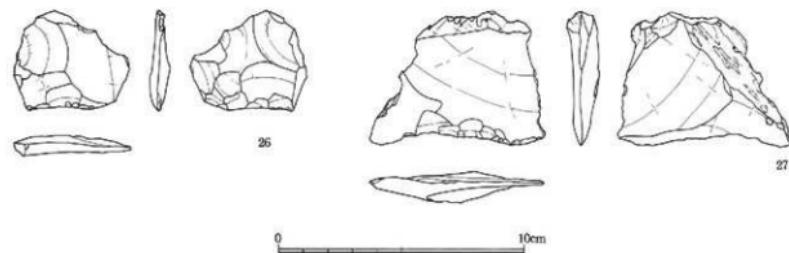


図46 各階横断面



0 20cm



0 10cm

SD1301. 17・19・23 SD1301～1303 16 SD1308 3・10・12・21 SK1302 9 落込み 8・13・14・15・20・24・27 残りは第16層

図47 第13面・第16層出土遺物

14. 第14遺構面

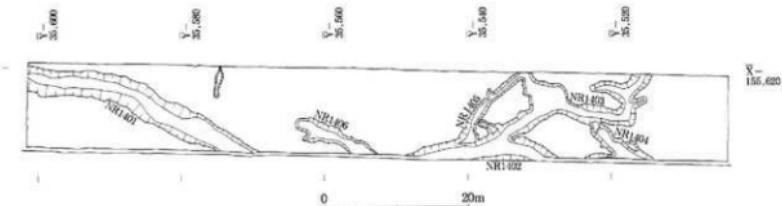
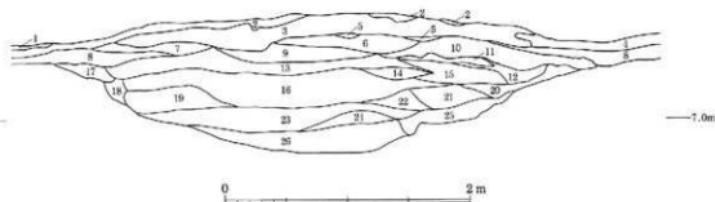


図48 第14遺構面



- | | | | | | |
|---|----------------|----|---------------------|----|------------------|
| 1 | 524/1暗緑色シルト | 10 | 575/2灰オリーブ色粘土 | 19 | 7.575/2灰オリーブ色粘土 |
| 2 | 7.576/1灰色粘土～相砂 | 11 | 575/2灰オリーブ色粘土～相砂 | 20 | 7.576/1灰色粘土～相砂 |
| 3 | 7.576/3オリーブ色粘土 | 12 | 576/4灰黄色粘土 | 21 | 7.576/1灰色粘土～相砂 |
| 4 | 1054/1暗緑色砂質シルト | 13 | 576/4灰黄色砂質 | 22 | 1056/1灰色粘土 |
| 5 | 576/1淡黄色粘土 | 14 | 576/4淡黄色粘土 (13より細多) | 23 | 7.576/1灰色粘土 |
| 6 | 576/5灰オリーブ色砂質 | 15 | 577/4淡黄色粘土から砂 | 24 | 1056/1灰色粘土 |
| 7 | 576/5灰オリーブ色粘土 | 16 | 576/5灰黄色粘土 | 25 | 1073/2オリーブ色粘土シルト |
| 8 | 576/5オリーブ黄色粘土 | 17 | 575/1灰色中～粗砂 | 26 | 576/2灰オリーブ色粘土 |
| 9 | 577/4淡黄色粘土 | 18 | 1974/2オリーブ黄色粘土～中砂 | | |

図49 NR1401断面

西に向かって流れる自然河川を検出した。調査区西半では1本の流れであるが、調査区東半では複雑に枝分かれしている。数カ所で動物の足跡（主に鹿？）が残っていた。調査区西侧で検出したNR1401は幅約4m、深さ0.4~0.7mで下流（西）にむかう深くなる。面の高さは7.35~7.67mである。

第14面の上には第17・18層が堆積している。17層は13面のベースであるが部分的にしか存在しない。17層からは土器2点が出土した。18層は14面全面を覆う砂層であるが、遺物は全く含んでいない。そのため河川の時期は不明であるが、層位的対比と遺構の類似性から（その3）調査区の縄文時代晚期の面に対応すると思われる。

15. 第15遺構面

その3調査区で縄文時代晚期の面の約1m下で土坑、ピットが検出され縄文後期と見られる土器片が出土した。そのため、縄文後期の遺構のひろがりを確認すべく当初の設計より深く掘り下げた。しかし、湧水がはげしく面的な遺構検出は不可能であった。わずかに北西隅の断面でピットを確認したにとどまる。遺物は出土しなかった。

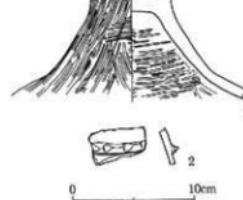


図50 第17層出土土器

第2節 96-2区

第1層は第1遺構面を覆う洪沢砂層である。96-1区の第1層に対応する。第1遺構面では多数の足跡を検出した。東西方向に足跡が希薄な部分があり、畦畔の痕跡である可能性がある。T.P.9.70~9.76m。

第2層はオリーブ黒色細砂（1）で厚さ約20cmの土壤化層である。96-1区の第2層に対応する。第2層下の第2遺構面では少数の足跡、不定型土坑を検出した。標高はT.P.9.5m前後である。

第3層はオリーブ黒色細砂・中砂（2）である。厚さは10~20cmで、北にむかって薄くなる。96-1区の第2層に対応する。この層下面の第3遺構面では足跡を検出した。中央やや北では東西方向の砂帶を検出した。平面的には検出できなかったが、断面でみるとやや高まりを形成していることが確認できる。標高はT.P.9.3~9.4mである。

第4層は暗オリーブ灰色砂質粘土（3）で、厚さ10~18cm、96-1区第3層に対応する。この層を除去して検出した第4遺構面では足跡、溝を検出した。溝は東西方向のもので、第1遺構面の足跡希薄部分、第3遺構面の砂帶に重なる。なお、この溝は第5遺構面で検出したが、断面の検討からこの面に属すると考えられる。T.P.9.2m前後である。

第5層はオリーブ黒色粘土（4）で厚さ10~20cm、96-1区の第5層に対応する。第5遺構面では足跡を検出した。面の高さはT.P.9.0~9.16mである。

第6層は暗緑灰色粘土（5）で厚さ約20cm、96-1区の第7層に対応する。第6遺構面では足跡を検出した。畦畔は検出していないが、足跡の残存状況から地形に沿った東南一北西方向の畦畔が推定できる。T.P.8.8~8.98mである。

第7層はオリーブ黒色砂質粘土（6・7・8）で、厚さは30~40cmである。第7遺構面では足跡を検出した。T.P.8.7m前後である。

第8層はオリーブ黒色粘土（9）で、厚さ約10cmである。第8遺構面では足跡を検出した。面の高さはT.P.8.6m前後である。

第9層は暗青灰色砂質粘土（10）で、厚さ10~16cm、96-1区の第11層に対応する。第9遺構面では少数の足跡を検出した。T.P.8.3~8.4mである。

第10層は上部が暗緑灰色シルト質粘土（11）で、厚さは10~14cm、下部は灰色砂（12）で厚さ約8cm、96-1区の第13層に対応する。第10遺構面では足跡を検出した。T.P.8.16~8.25mである。

第11層上部はオリーブ灰色粘質シルト（13）で厚さ約8cm、下部は暗オリーブ灰色砂礫（14）で厚さ約10cm、96-1区第13層に対応する。第11遺構面では畦畔、足跡を検出した。96-1区第10遺構面に相当する。面の高さはT.P.8.08~8.20mである。

第12層は暗オリーブ灰色粘土（15）で厚さ10~20cm、96-1区の第14層に対応する。第13層は暗オリーブ灰色・暗緑灰色粘土（17）である。第14層は暗オリーブ灰色粘土（18・19）である。第12層以下では遺構は検出されなかった。第15層は暗緑灰色粘土（20）、第16層は緑灰色粘土（21）、第17層は暗緑灰色粘土（22・23）で、この3層は96-1区の第17層に対応する。

第18層は暗オリーブ灰色粘土（24）で、厚さ約10cm、96-1区の第19層に対応する。この層の上面は96-1区の第14遺構面に相当するが、遺構は検出されなかった。面の高さはT.P.7.22~7.3mである。

96-2・3区では少量の土器が出土したが、図化できるものはほとんどなく、96-1区の所見と矛盾しないので掲載は見送った。

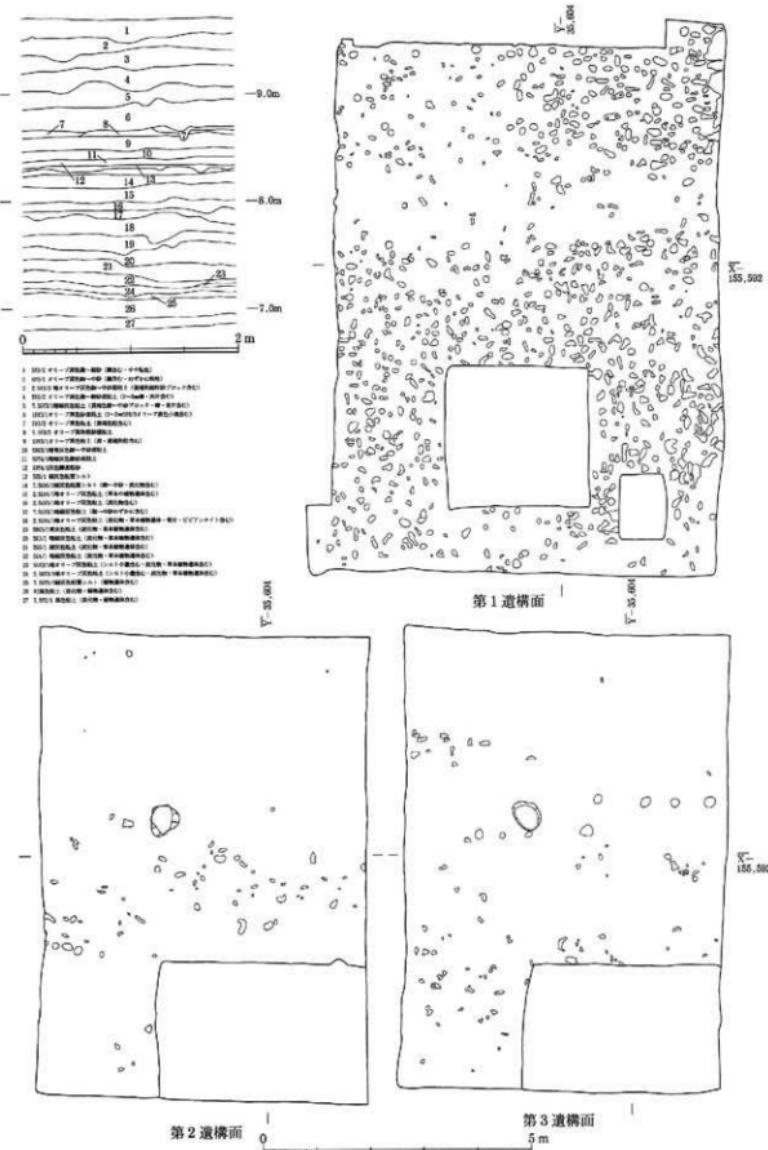


図51 96-2区断面・第1～3遺構面

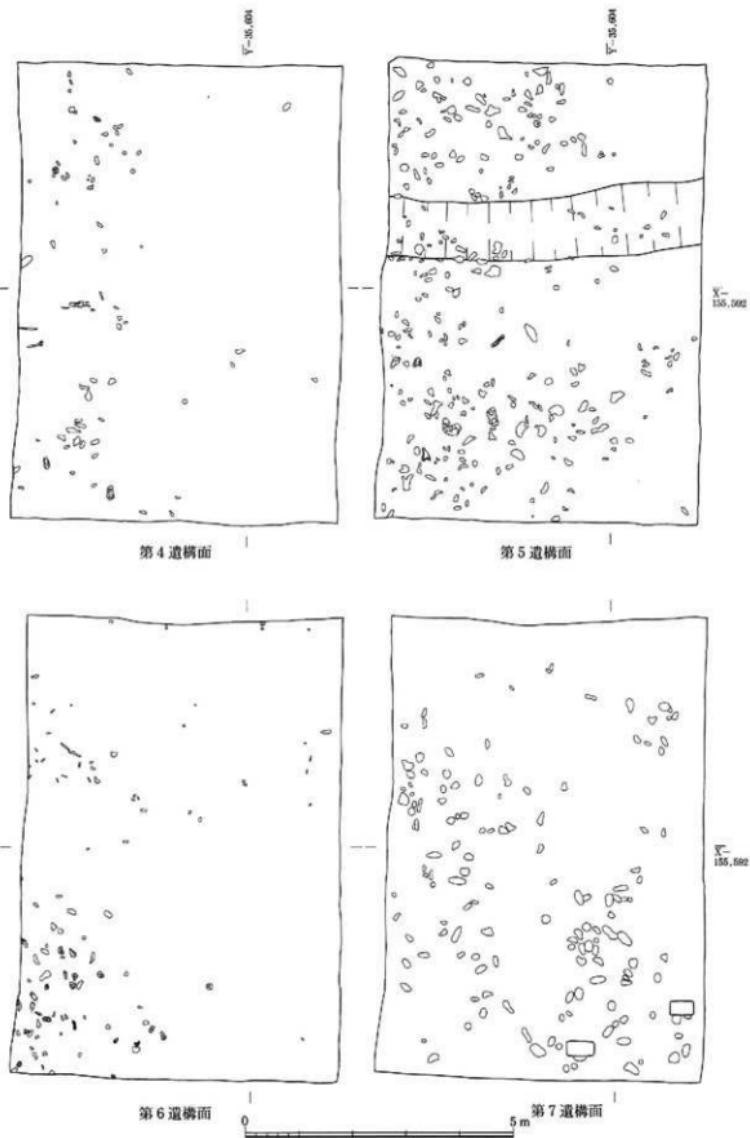
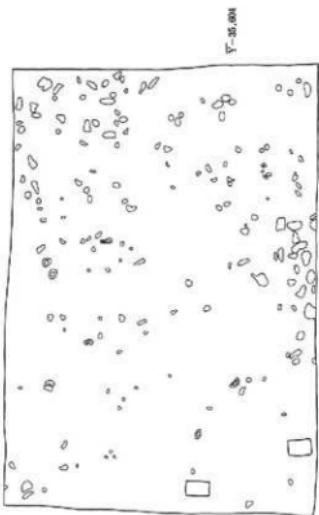
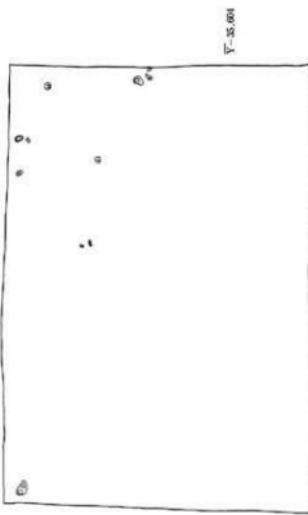


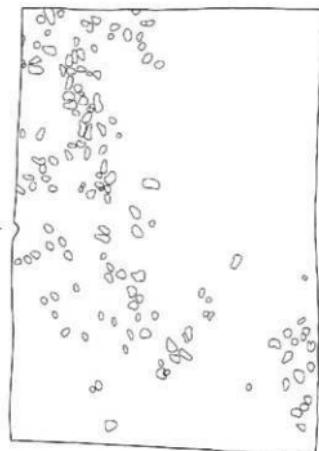
図52 96-2区第4～7遺構面



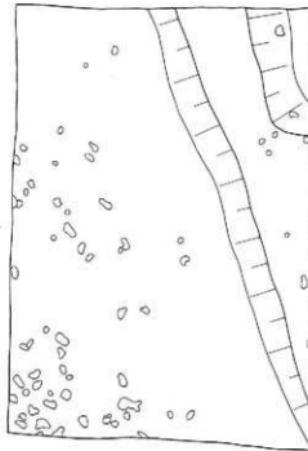
第8遺構面



第9遺構面



第10遺構面



第11遺構面

图53 96-2区第8~11遺構面

第3節 96-3区

第1層は第1遺構面を覆う洪水砂層である。96-1区の第1層に対応する。第1層を除去後に検出されたのが第1遺構面である。足跡を検出した。面の高さはT.P.10.24~10.28mである。

第2層は灰オリーブ色微砂（1）で厚さ10~30cmである。96-1区の第2層に対応する。第2層下の第2遺構面では足跡、不定型土坑を検出した。標高はT.P.10.0~10.1mである。

第3層は灰オリーブ色砂質土（2）で厚さは20cm、下部に礫を含む部分がある。96-1区の第3層に対応する。この層下面の第3遺構面では足跡、ビットを検出した。標高T.P.9.8~9.96mである。

第4層はオリーブ黒色砂質土（3）で、厚さ約20cm、96-1区第5層に対応する。この層を除去して検出した第4遺構面ではごくわずかの足跡を検出した。面の高さはT.P.9.59~9.64mである。

第5層上部はオリーブ黒色砂質土（4）で厚さ約20cm、96-1区の第5層に対応する。下部は灰・黃褐色微砂・細砂（5・6）で、厚さ10~15cm、96-1区の第6層に対応する。第5遺構面では足跡を検出した。面の高さはT.P.9.5~9.6mである。

第6層は暗緑灰色シルト（7）で厚さ約10cmである。第6遺構面では足跡を検出した。高さはT.P.9.2~9.3mである。第7層はオリーブ暗青灰色シルト質土（8）で、厚さは約25cmである。第7遺構面では足跡を検出した。T.P.9.0m前後である。第8層は暗青灰色粘土（9）で、厚さ約15cmで、96-1区の第7層に対応する。第8遺構面では足跡を検出した。面の高さはT.P.8.82~8.9mである。

第9層上部は暗緑灰色粘土（10）で、厚さ約20cm、96-1区の第8層に対応する。下部は暗緑灰色粗砂（11）で厚さ10cm以下である。第9遺構面では足跡を検出した。T.P.8.54~8.7mである。

第10層は暗緑灰色粘土（12）で、厚さは約20cmである。第10遺構面ではごくわずかの足跡を検出した。T.P.8.4~8.48mである。

第11層は暗緑灰色粘土（13）で、厚さ約25cmである。第11遺構面では南北方向の溝を検出した。面の高さはT.P.8.15m前後である。

第12層は暗緑灰色シルト（15）で厚さ10cm、96-1区の第13層に対応する。第12遺構面では足跡を検出した。面の高さはT.P.8.0m前後である。

第13層は暗緑灰色粘土（16）で、厚さは約10cmである。第13遺構面では第11面と同じ位置に南北方向の溝を検出した。溝は南に向かい浅くなり、調査区南半では痕跡のみの検出である。面の高さはT.P.7.9m前後である。

第14層はオリーブ黒色粘土（17）で、厚さ18cmである。96-1区第14層に対応する。

第15層は暗オリーブ灰色粘土（18）で、厚さは10~15cmである。第15遺構面ではビットを検出した。T.P.7.8~7.85mである。

第16層は緑黒色粘土（19）で、厚さ10~30cm、96-1区の第17層に対応する。第16遺構面ではビットを検出した。T.P.7.45~7.5mである。

第17層はオリーブ灰色粘土（20）で、厚さは8~14cm、96-1区第19上層に対応する。第17面では北辺で東西方向の溝または川を検出した。面の高さはT.P.7.3mである。以下遺構はない。

第18層は暗オリーブ灰色粘土（21）で、厚さ約8cm、96-1区第19上層に対応する。第19層は緑灰色粘質シルト（22・23・24・25）で、厚さ約20cm、96-1区第19中層に対応する。第20層は黒色粘土（26・27）で、厚さ30cm、96-1区第19下層に対応する。

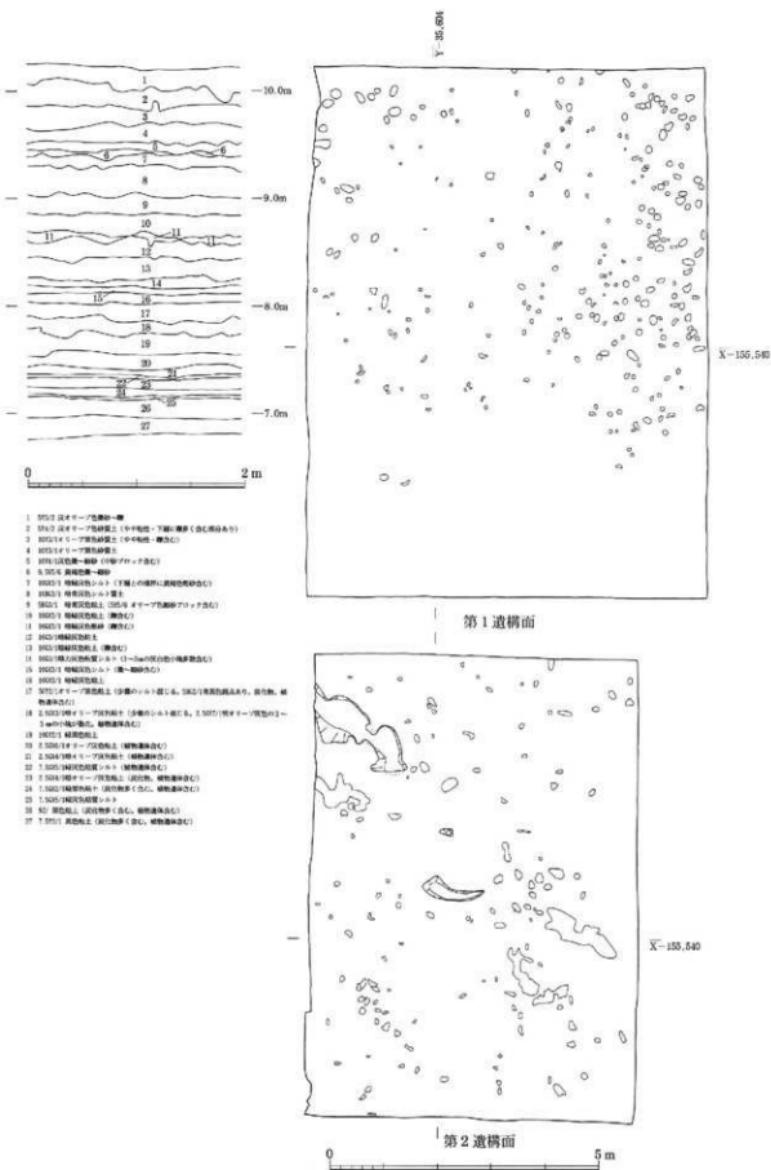


図54 96-3区断面・第1・2遺構面